

兵學教程讀本

佛國巴爾鐵爾密著

一

特39-885



1200800193378

特39

885

東 京 圖 書 館

新 門 一 七 函

四 部 四 架

七 類 四 六 號

始



特39
885

陸軍士官學校譯

兵學教程讀本

明治十二年
十月刻成

內外兵事新聞局藏版

此篇係于法國武學院聖西爾書教程書法國自曩時有日耳曼之敗。無論制度藝術。一切足以為強兵之資者。無不講究。而其振興國勢者。蓋亦不鮮矣。今閱此篇十有五卷。內之則軍政養士徵兵之得失。外之則古今各國兵制之利病。大之則千軍萬馬之聚散離合。小之則一夫隻騎之趨舍起伏。以至結營布陣。攻山涉水之法。攻城野戰之略。靡不詳悉具備。可謂學兵之津筏也。夫學兵之要。無所不知。無所不知則明。明則斷。斷則勇。有所不知則疑。疑則泥。泥則怯。勇怯者勝敗之所由判也。可不察乎。佐昔源將軍。以天縱之才。小少後軍。馮績偉勳。天下無比。及中平折節。學兵法於江博士。智略愈長。以為曠世之名將。是

特39
885

陸軍士官學校譯

兵學教程讀本

明治十年
十月刻成

內外兵事新聞局藏版

此篇係于法國武學院聖西爾營教程書。法國自曩時有日耳曼之敗。無論制度藝術。一切足以為強兵之資者。無不講究。而其振興國勢者。蓋亦不鮮矣。今閱此篇十有五卷。內之則軍政養士徵兵之得失。外之則古今各國兵制之利病。大之則千軍萬馬之聚散離合。小之則一夫隻騎之趨舍起伏。以至結營布陣。跋山涉水之法。攻城野戰之略。靡不詳悉具備。可謂學兵之津筏也。夫學兵之要。無所不知。無所不知則明。明則斷。斷則勇。有所不知則疑。疑則泥。泥則怯。勇怯者勝敗之所由判也。可不察乎。往昔源將軍。以天縱之才。小少後軍。鴻績偉勳。天下無比。及中年折節。學兵法於江博士。智略愈長。以為曠世之名將。是

可以為學兵者之龜鑑也。於是乎言。

明治十一年八月

陸軍少將曾我祐準撰

陸軍大尉聖西爾學校兵學教授巴爾鐵爾密謹言聖西爾督
學將官漢理王閣下

自日耳曼之役起閣下竭力於本校欲使本校駕上國內諸校、
則巴爾所知悉也、閣下嘗題本校旗曰、教育者防衛本國之要
也、今閣下所督司令官及生徒、夙夜勉學、思守義殉國、以揚榮
名于天下、可謂不肯題緯矣、蓋皆仰望閣下之風、而自奮興者
也、巴爾頃著一書成、謹呈之左右、以乞覽觀、願者巴爾此舉亦
莫非閣下誘掖之賜也

一千八百七十四年第一月一日大尉巴爾鐵爾密謹
再拜言

兵學教程讀本卷之一

目錄

- 第一套 軍ノ編制及之兵制
- 第一編 國軍制度ノ要領
 - 第一篇 提要
- 第一章 戰爭說
- 第二章 兵力
- 第三章 兵學
- 第四章 兵學教程ノ說
 - 第二篇 國軍ノ制度
 - 第一章 陸軍卿

第二章 軍ノ編成

第三章 兵制

第三篇 引用書目

兵學教程讀本卷之一

佛郎西聖西爾學校教官 大尉巴爾鐸爾密 著

日本陸軍士官學校教官 少佐荒井宗道 譯

第一卷 軍ノ編制及ヒ兵制

第一編 國軍制度ノ要領

第一篇 提要

第一章 戰爭說

孟得斯答曰ク國ノ保安ニ於ケルハ猶人ノ生存ニ於ケル
カ如シ人教ヘスト雖モ其身ヲ護ルニ當テハ殺戮ノ權ヲ
持シ國其國ヲ保タントスレハ戰爭ヲナスノ權ヲ持スト
此數語戰爭ノ目的及ヒ權理ヲ説得テ盡セリ

兵學教程讀本卷之一

斯ノ如クナルヲ以テ若シ相争フ國ノ上ニ立テ其議論ノ
曲直ヲ裁決スル審官有リテ其批判ノ案ヲ奉セシムル
ルニ非サシハ國其權理ヲ持スルニ戰爭ヲ以テ無二ノ良
術トナス可シ是近隣ノ我ヲ待ツノ專縦ヲ責メ及ヒ其我
ヲ制セント欲スル志ヲ折クニ嚴勵公正ノ法方ナリ蓋シ
彼此往来シテ無事ヲ謀ルニ當テ其議論破ルニ及ヒテ
ハ戰爭ノ能力缺ク可ラサル者トナルベシ而シテ其不易
ノ目的トスル所ハ敵ヲシテ復々抗スルヲ得サラシムル
ニ在リ假令然ラサルモ敵ヲシテ屈服シテ我要求ニ從ハ
サルヲ得サラシム可キナリ然レ其戰ヲ宣フル種ノ歸ス
ル所ハ各國人民社會ノ風ニ関ルモノナリ

凡ソ戰ハ陸戰海戰守戰攻戰攻城野戰外患内乱ノ外ニ出
ルヲ無シ

伊 陸戰海戰

陸戰ニハ陸軍ヲ用キ海戰ニハ海軍ヲ用ユト雖レ次ニ掲
クル拿破侖第一ノ此二軍ヲ以較シタル説ヲ見テ以テ其
難易ヲ察ス可シ
夫レ戰車ハ陸戰ノ兵ヲ失フテ海戰ニ以スレハ多シ故ニ
陸戰ヲ以テ最危シトス海軍ノ兵ハ一艦隊一役間戰フ
唯一次ヲミ而シテ陸軍ノ兵ハ日トシテ戰ハサル無シ又
海軍ノ危難疲勞大ナリト雖レ陸軍ニ比スレハ甚タ小ナ
リ且海軍ハ常ニ居住庖厨病院藥局ヲ携フルヲ以テ絶テ

飢渴ノ患アルヲ無シ若シ夫レ佛郎西英吉利ノ海軍ノ如
キハ軍紀嚴ニシテ清滌ノ法乱レヌ加之經驗ヲ以テ衛生
ノ法ヲ詳ニシテ殆ト遺漏無キカ故ニ陸軍ニ比スレハ病
兵甚ク少ナシ又海軍ノ兵ハ戦闘ノ危ヲ冒シ加フルニ風
浪ノ危難ニ罹ルト雖モ自ラ之ヲ救フノ術有リテ大ニ之
ヲ滅殺ス而シテ陸軍ハ土民ノ叛乱ニ逢ヒ隊中逐次ニ死
傷ニ罹リ敵ノ輕兵ニ不意ヲ擊ツル、ノ恐アリ故ニ其危
難ノ大小固ヨリ同日ノ論ニ非サルナリ
海軍主將ト陸軍主將ト其具フヘキ器量同シカラス陸軍
ヲ指揮スルノ器量ハ天縱ニ在リ海軍ヲ指揮スルノ器量
ハ練磨ニ在リ

蓋シ陸工ノ軍術ハ智ヲ運ラシ機ヲ察スルノ術ナリ海上
ノ軍術ニ於テハ智ヲ運ラシ又機ヲ察スルヲ須ヒス惟堅
確ト練磨トニ在ルノミ海軍ノ將ハ唯航海ノ一術ヲ學フ
ノミニシテ足ル陸軍ノ將ハ其學ヲ所極ノテ廣ク以テ軍
中ノ萬機ニ應シ其見聞スル萬事ヲ察シテ事機ニ乘スル
ノ智畧ヲ具フヘキナリ海軍ノ將ハ絶テ先見推考ヲ用キ
スシテ敵ノ所在及ヒ其大小ヲ詳ニスヘシ陸軍ノ將ハ萬
事皆瞑暗ノ間ニ在リテ敵軍ヲ見ルモ決シテ審確ナラス
又其所在モ確實ナラス其二軍相對スルニ方テハ僅ニ地
ノ高低有ルカ僅ニ森林ノ如キ者有レハ敵軍ノ一部其蔭
ニ隠ル故ニ極メテ熟練シタル活眼ヲ用ユト雖モ其見ル

所僅ニ四分ノ三ニ止マルヘシ茲ヲ以テ陸軍ノ將之ヲ見
之ヲ知リ之ヲ決スルハ明察ノ眼カト推考ノ至レルト機
ヲ見ルノ神ナルトニ由ラスシハ能ハサルナリ海軍ノ將
ハ熟練ノ眼カヲ以テスレハ一望則敵ノ大小ヲ悉ス可シ
抑陸軍主將ノ事ヲシテ苦艱ナラシムルハ其人馬ノ給養
ニ在リ若シ之ヲ給養吏ノミニ委託スレハ其事終ニ擧ラ
ス其出師ノ擧ヲシテ轉躓セシムヘシ而シテ海軍ノ將ハ
盡ク其身ト共ニ率ヒ行クヲ以テ絶テ窮乏ニ苦シムト無
ク且海軍ノ將ハ地形及ヒ戰場ノ偵察ヲ要セサルヲ以テ
絶テ探偵ノ勞ナシ夫レ印度海インド亞米利加海アメリカ滿砂海マニラノ如キ
只一樣ノ水面ナリ此水工ニ於テ才能ノ大小ヲ以テ巧拙

ヲ見ルヘキ者ハ其地ニ於テスル恒風ヲ知り及ヒ此地必
ス此恒風ノ起ル可キヲ察シ或ハ大氣ノ徵候ニ據テ之ヲ
占フニ在ルノミ而シテ其之ヲ知ルノ伎倆ハ經驗ニ由テ
得ヘキモノニシテ且實ニ經驗ニ由ルヨリ外道無キモノ
トス

陸軍ノ將ハ決シテ其定メテ戰フ可キ戰場ヲ知ルト無シ
故ニ其眼ノ一撃ハ則睿知ノ發ニシテ絶テ一定ノ法則ヲ
知ルニ非ラス故ニ局地ノ形勢ヲ察スル徵候ハ變化常ナ
ラスシテ殆ト經驗ノ功ヲ以テ推スヘキ者無キニ至ル蓋
シ地勢ヲ一望シテ直ニ其地ノ利害ヲ察スルハ其人自得
ノ戰畧眼ニシテ名將ノ天授ト謂フヘキ者ナリ然レ地理

圖上ノ實驗ヲ積ミシト教育ヲ以テ得タル練磨ト地圖ヲ
 見ル^ルトニ練熟シタルトハ共ニ此眼カヲ添フルモノトス
 海軍主將ノ艦長ニ依頼スルハ陸軍主將ノ旗下ノ諸將ニ
 依頼スルヨリモ大ナリ是陸軍ノ將ハ自ラ兵ヲ指揮シ其
 欲スル所ニ赴キ及ヒ運動ノ誤リヲ正ス^ルヲ得ルト雖^モ
 海軍ノ將ハ其威令ノ行ハル、所唯其乘ル所ノ船中ノ人
 ニ止ル且礮烟ノ為ニ其記號ヲ遮ラレ風其方象ヲ變シ或
 ハ戰列中風象ヲ同フセサル^ルト有リ故ニ戰鬪ノ萬事ニ於
 テ屬長ノ任スル所最大ナル可シ
 以上論セシ所ハ近代名將ノ說ナリ此說ニ拠レハ陸軍ハ
 海軍ニ比スレハ缺乏ヲ患ヒ身體ヲ疲勞シ危險ヲ冒ス^ル

大ニシテ且巧ニ其戰爭ヲ指揮センニハ善ク事ニ熟シ智
 畧ニ富マサル可カラサルナリ

呂 攻戰守戰

攻戰ハ敵地ヲ侵奪シ及ヒ進シテ敵ヲ破ラントスル軍ノ
 通勢ナリ而シテ守戰ハ之ト異ナリ敵ノ侵入ヲ抗拒スル
 軍ノ常ニ取ル所ノ戰勢ナリ

夫レ氣勢盛ニシテ勇敢決進スルハ攻者ノ常態ナリ凡テ
 攻勢ノ戰ハ士卒ノ勇氣ヲ増シ敵ヲシテ迷惑セシメ其先
 制ノ勢ヲ奪ヒ其戰鬪ノ手段ニ窮セシメ而シテ自ラ敵地
 ノ民力ニ頼リ以テ其兵ヲ保育スルヲ得ルナリ然レ攻者
 ハ眼力明察ニシテ智畧ニ富ミ以テ善ク不意ノ事變ニ應

答セスンハアラス蓋シ攻戰ハ其倚頼スル所ノ者確實ナ
 ラス其測定スル所ノ者又常ニ變化シ其變化スルニ應シ
 テ時々其方策ヲ斟酌セサル可ラサルナリ
 夫レ軍ノ策ヲ決シテ守戰ヲ為ルハ常ニ其軍ノ力敵ニ劣
 レル時トス然レ守勢ノ軍ハ地形ノ探偵至レル地ニ在リ
 テ進退シ其工夫多般ナラス而シテ精密ナル算測ニ從ヒ
 其陣地ヲ定メテ防禦ノ計ヲ為シ進退運動容易ニシテ戰
 ヲ接スルニ常ニ其機會ヲ得又我間諜周圍ヲ繞レルヲ以
 テ我主將敵ノ動靜ヲ察スルヲ容易ナリ又敵前ヲ空虚ニ
 シテ却テ後衛輜重枝隊ヲ襲フテ之ヲ窘窮セシムルヲ
 得ヘシ然レ守戰ハ原ト兵力ノ及ハサル微候ニシテ我先

シテ彼ヲ制スルノ利ヲ失ヒ兵ノ勇氣ヲ沮喪シ敵我貴重
 スル所ノ者ヲ搶掠スルヲ拒ムヲ得ス或ハ敵ノ計策ヲ
 覺ラサルカ為メ大ニ兵力ヲ分ツト有リ是守兵ノ損害ナ
 リ
 彼我ノ二軍終始守勢ヲ取ルカ或ハ攻勢ヲ取ル戰ハ甚々
 稀ナルモトス凡ソ戰爭ハ必ス兵畧ト戰術ノ二點上ニ
 工夫ヲ為ストニシテ其兵畧ヲ以テ攻勢ヲ取リタル戰ニ
 モ其戰術ニ於テハ守勢ヲ取リ又兵畧ヲ以テ守勢ヲ取リ
 タル戰爭ニモ其戰術ニ於テハ却テ攻勢ヲ取ルト有リ蓋
 シ斯ノ如ク相變換スルハ戰爭中新ニ方策ヲ建ルカ或ハ
 不意ノ事變ノ發スルニ因ルナリ今一二ノ例ヲ舉ク見テ

以テ其區分ヲ知ル可シ

一千八百〇五年拿破侖第一奧地利ト戰ヒシハ猛烈ナル
兵畧ノ攻戰ナリト雖モ其基斯の律德ノ勝利ハ守勢ノ戰
ヲ以テセリ七年戰ノ時一千七百五十七年日耳曼ニ於テ
セシ戰爭及ヒ一千八百十四年佛蘭西ニ於テセシ者ハ共
ニ侵入戰ナリ而シテ非德黎第二拿破侖第一皆其水戰
ノ說ハ後ハ大抵攻戰ノミヲ為セリ夫ノ攻守ノ說ノ如キ
ハ後ニ兵畧學戰術學ノ論スル時說ク所有ルヘキヲ以テ
今茲ニ贅セス唯拿破侖第一ノ一言ヲ見ルヘシ曰ク守勢
ノ戰ヲ以テ攻勢ニ轉スルハ戰中最高ニ難キ事ナリト

波 攻城野戰

凡テ陸上ニ於ケル攻守ノ二戰ハ其計策ニ於テ專ラ原野
ニ敵ト接スルヲ以テ目標トナスト堡塞ヲ取ルヲ以テ目
標トナストニ從ヒ分テ攻城野戰トス

戰記ヲ見ルニ往昔突來ノ攻圍ヨリ輒近西巴士多トノ攻
城ニ至ルマテ攻城ノ戰放棄ニ違アラスト雖モ未タ路
第十四ノ末年ニ於ケルカ如ク多キハアラス蓋シ其然ル
所以ハ當時陸軍卿タリシ路窩瓦ノ指揮ノ風茲ニ癘スル
ニ由リシナリ事ハ後ニ至リ詳說スヘシ平野ノ戰ハ大智
術ヲ逞ラスヘキ者ニシテ幾斯達非亞德非非德黎第二拿
破侖第一ノ貽セル名鑑アリ
夫レ戰爭ハ專ラ平野ニ於テ攻襲ヲ為シ或ハ唯攻圍ノ戰

ヲ事トスル者無キニアラスト雖此大抵此二戰ヲ兼テサ
ルハ無シ方今盛ニ堡寨ヲ設クル陣ヲ用ウルヲ以テ觀レ
ハ後來戰爭ハ必ス平野ノ運動ト攻城ヲ兼テルヲ多カル
ヘシ

仁 外患内乱

凡テ外國人ト戰フ戰爭ヲ外患ト云ヒ内國人民ノ間ニ於
テスルヲ内乱一名内訌ト云フ
内乱ヲ釀ス所以種々有リト雖其最多キハ政治、教法、兵
制ナリ而シテ其由テ起ル所ニ從ヒ名ツケテ政治乱、教法
乱、兵制乱ト云フ
外患ノ記ハ則萬國ノ史ナリ内乱ノ記ハ其國ノ盛衰興廢

ナリ而シテ外患ノ記ハ諸國人民ノ大小強弱ヲ見ルヘク
内乱ノ記ハ國內人民社會ノ風ヲ見ルヘキナリ

保 戰律

夫レ戰爭ハ人民ノ獨立ヲ維持シ及ヒ其國体ヲ失ハサル
ヲ欲シ終極ニ至リ施ス所ノ一術ニシテ人ノ世ニ在ル風
俗ヨリ發スル動作ナリ其事タルヤ蓋シ豫メ其發スルヲ
知ルヘシ故ニ之ヲ治ムル法ヲ設ケ以テ之ヲ規制スルハ
其道ヲ得ルニ似タリ然レ戦争ハ固ト力ヲ闘ハス者ナル
カ故ニタトヒ準繩ヲ以テ之ヲ限制スルトモ自然ノ形勢
ニ據ルニ非サレハ遂ニ其限界ヲ立ルヲ得サルナリ
開化諸國ノ戰爭ハ大抵自ラ條例有リテ以テ事ヲ為サ、

ルハ無シ其詳ナルハ後ノ兵畧篇ニ於テ開載スヘシ凡テ
條例ハ兵力ノ用法ヲ抑制スル所以ノモノト雖モ若シ其
所為報讐ニ涉リ或ハ兩軍ノ一軍他軍ノ権理ヲ推卻スル
并ハ此條例忽チ破ルヘシ
凡テ相戰フ者ノ一黨其所為獨外ニ出ルカ如キハ内亂戰
ノ常トス

此條例ハ自然ニ行ハレシ者ニシテ別ニ條例書ヲ作りシ
ニ非ス而シテ近時ニ至リ諸國悞議シテ成ルモノ有リ即
巴黎ノ條約日内巴及ヒ聖彼得堡ノ條約是ナリ
巴黎ノ條約ヲ以テ海上ニ関ルヲ定ムルヲ左ノ如シ
一 商船ヲシテ敵國ノ海船ヲ奪掠セシムルヲ禁ス
日往

ハ戰爭ノ時商船ヲシテ敵國ノ海船ヲ奪掠セシムルヲ有リ

- 二 軍用ノ諸品ヲ密賣スルニ非サレハ敵國ノ商品ヲ中立國ノ旗下ニ隱スヲ得ハシ
 - 三 中立國ノ商品ハ軍用ノ密賣品ニ非サレハ敵國ノ旗下ニ在リト雖モ之ヲ如何トモスルヲ能ハス
 - 四 封港 此法真ニ封鎖スルニアラサレハ之ヲ行フヲ許サス
- 中立國ハ宣戰有リシ日ヨリ凡テ軍用密賣品ト為スヘキ者ヲ速ニ布告ス又若シ海賊ヲ為ス者アラハ視テ之ヲ相争フ列國ト為サ、ルヘシ後來復タ拿破侖第一ノ用ヲタル大地封鎖ノ如キ慘狀ヲ見

ルヲ無カルヘシ

此條約ハ一千八百五十六年ニ於テセシ者ナリ

日内巴ノ條約ハ一千八百六十四年ニ於テセシカ逐次ニ

改正ヲ加エ大概左ノ條款ヲ取レリ

- 一 陣中病院及ヒ病院ハ中立トシ彼我二軍共ニ之ヲ護衛シ且其待遇ヲ厚クスヘシ
- 二 陣中病院及ヒ病院ノ人負モ亦局外中立ノ惠ヲ蒙ル可シ
- 三 傷者ノ便利ト為ル土人ハ厚ク之ヲ待シ且其居住自由ナルヘシ
- 四 傷兵ハ彼我ヲ論セス聚テ之ヲ撫恤ス可シ

病院ノ人負及ヒ屬具ハ條約書中ニ載スル記号有ル者ノ外ハ中立ノ權無シ而シテ此中立ヲ標スルハ白旗及ヒ袖記ニ赤キ十字ヲ徽章ト為シタル者ナリ故ニ此白旗ヲ建レハ兵隊一切其人負家屋ヲ襲ヒ及ヒ捕獲ト為スヲ得サルナリ

聖彼得堡ノ條約ハ一千八百六十八年ニ於テセリ此條約ニハ四百瓦羅述以下ニシテ炸藥及ヒ雷火藥ヲ填シタル彈丸ヲ用ウルヲ禁セリ

以上説ク所ハ特リ法典ニ載スル所ノ戰律ナリ此外軍人軍紀ノ趣旨ヲ外ニシテ尚從テ可キ者ハ唯拿破侖第一ノ一言アルノミ曰ク戰爭ト雖氏亦政治ニ異ナラスシテ苟

モ事酷虐ニ汲ル者假令ハ人ヲ殺シ家ヲ毀テ物ハ已ムトヲ得サルニ非サレハ敢テ妄リニ之ヲ行フヲ許サズ若シ之ヲ犯ス者ハ盡ク見テ以テ過惡ト為スヘシト

第二章 兵力

夫レ兵力カトハ國其戰爭ヲ為サント欲シテ用ウル万物ノ總稱ナリ而シテ之ヲ分テ二種トス人負及ク料材是ナリ人負ヲ以テ陸軍及ク海軍ヲ立ツ故ニ軍ハ國ノ境界及ク内地ヲ防禦スヘキ壯者ノ集リタルモノナリ而シテ其功用ノ最見ハル、所ハ戰鬪ニ在リ又其確定シタル目的ハ捷利ナリ故ニ軍ノ建制ハ偏ニ戰爭ヲ為スニ便ナラシムヘキナリ

料材ハ軍ノ保育兵械及ク其職分ニ於テ要求スル諸物及ク城寨軍艦等ヲ總稱スル名ナリ立君政治ノ國ニ於テハ國君兵ノ元帥ナリ共和政治ニ在テハ時ノ國長之ニ任ス凡テ國家防衛ノ基ハ常備兵ヲ置クニ在リ故ニ今之ヲ置ク所以ノ主旨ヲ説サル可ラス此常備兵ヲ備ル主旨ハ或ハ民心其所向ヲ誤リシ國ニ在テハ固ク執テ非ト為スト雖凡テ國ノ獨立ヲ維持スルニ苦心スル諸國ニ於テハ古今皆之ヲ採用セサルヲ無シ故ニ今日建軍ノ法ハ同ク此理ニ基クナリ即次ニ掲クルカ如シ

一 外寇ヲ防ヒテ人民ヲ保護ス

二 内國ノ敵ヲ鎮定シテ人民ノ社會ヲ保護ス

三 兵ノ教育準備軍紀

夫レ國ハ内憂外患ヲ防ク為メ十分ノ兵力ヲ備フルハ勢ノ當ニ然ルヘキ所ナリ若シ最終ノ期ニ至ルマテ大兵ヲ秘匿シ新カク蓄ヘ以テ敵ノ不意ニ出テ之ヲ蹂躪スルヲ計ル國アラシニ其事ノ癸スルニ及ヒテ遽カニ其兵ヲ編成スルカ如キハ智ニ非ラサルヲ瞭然ケリ其不虞ヲ慮ルト國ヲ愛スル心トヨリシテ之ヲ觀レハ常ニ應用ニ堪エル兵ヲ備ルヲ以テ善シトスヘシ其故ハ現ニ今猶近隣ノ諸國ニ於テ其國計トスル所屬其趣ヲ異ニスル者有

リ且各其開化ノ度相徑庭スル者有ルヲ以テナリ蓋シ編成完備ノ常備兵ヲ備フルハ國ノ安康ヲ來シテ内國及ヒ外國ノ敵ヲ撃ツノ拳トナリ或ハ政府人民社會ノ權利ヲ保護スル律ニ從テ其權ヲ保ツノ器ト為シ或ハ耕作貿易工業及ヒ人民ノ殷富藝術ノ開達進歩ヲ庇護スルノ楯ト為ルヘシ故ニ常備兵ハ人民其國ノ防禦ヲ以テ其利ト為サ、ル國ニ於ケルカ或ハ其社會ノ法衰敗スル國ニ於ケルニ非サレハ之カ為メニ民ノ權利ヲ害フノ患ヒ無カルヘシ
往昔ノ共和政治ニ於テハ國中ノ諸民兵ヲ取リ國ヲ守ルヲ以テ當其義務トナスノミナラス人々之ヲ以テ榮譽ト

國ノ法典ヲ正シ審官ヲ置キ之ヲシテ軍兵ト之カ將長ヲ
 リシ侯伯トヲ服從セシムルノ權ヲ有タシメ諸君長ヲ臣
 下ノ列ニ下タセリ然ルニ權威盛ナリシ侯伯セ此改革ヲ
 以テ其民ヲ凌虐シ賤物ヲ掠ムルノ利ヲ失ヒ且審官ノ照
 查ヲ受クヘキト為リシヲ以テ大ニ之ヲ拒メリ當時厄
 不^ル周^ル中^古ノ時ニ當リ之命ノ奴隸兵免役ノ兵卒國
 賣^テ其劫掠ヲ助ケル者有リ之ヲ兵員甚多クシテ勢ヒ
 名^フクテ厄可^ル周^ルト云ヘリ
 最盛ナリ查理第七此兵ヲ以テ瑞士羅連獨立都邑ヲ伐テ
 及ヒ帝國ト戰ヒ曰ク以テ我軍ノ弊吏ヲ一洗スヘシト後
 一千四百四十四年查理第七賞倫周^ル馬^ル那州ニ於テ順良
 ナル君長ヲ會シ兵制改革ノ事卒レリ而シテ此君長ハ最

貴^キ加^ビ丁^ニ對^シテ直ニ言論スルトニ任シ且其改革ノ
 事ヲ助ケル功勞ヲ以テ十五公班尼多頓南^騎一隊ノ大サ槍
 徒騎ヲ合セテ六騎トス故ニ全隊ノ兵六百騎ノ司令トナ
 ナリ是レ佛即西騎兵隊制ヲ為スノ始ナリ
 スヘキヲ約セリ當時軍隊ヲ減シテ此十五公班尼多頓南
 ト為サント欲セシナリ
 又加比丁ハ國王自ラ之ヲ命シ王ノ為ニ公班尼ヲ編組シ
 且佛即西ノ騎兵中ニ於テ最勇敢善良ニシテ且騎術ニ熟
 シ兵備整フテ能ク戰ニ堪フル者ヲ擇テ之ヲ隊中ニ留メ
 自餘ノ者ハ悉ク卿里ニ歸ラシメ且毫モ法制ヲ乱ルハ一
 ヲ許サス若シ犯ス者ハ之ヲ罪スルト周流無頼ノ民ニ異
 ナルトナシ茲ヲ以テホク幾クナラスシテ道路安寧ニ商

賈工職ノ隆盛ナルヲ其企望スル所ニ起ヘ農人ハ飲々然
 トシテ皆其田ヲ耕シ而シテ國王ハ兵ノ精絶ニシテ常ニ
 用ニ堪ユヘキ者ヲ推シ其聲威大ニ國內ノ侯伯及ヒ外國
 ノ帝王ヲ震懼セシメタリ此時ニ至ルマテ諸都邑其部内
 ニ兵營ヲ置クヲ恐レシカ是ヨリシテ皆爭フテ之ヲ置
 カン^トヲ望メリ夫レ此建制ハ善ク民心ニ稱フヲ以テ農
 人皆振テ佛即西弓隊ニ在ルヲ以テ己ノ榮譽トナス^ト猶
 貴族ノ公班尼多頓南ニ在ルカ如シ是ニ於テ亞漢朱利厄
 厄可尔固尔^ラ拉頓通^{共ニ厄可尔ノ類}ノ如キ兵隊及ヒ民兵^時
^{降ニ高貴農人}ハ盡ク廢止シ旗隊^{有土臣}ノミヲ存セシカ
 第二回ノ改革ニ至テ又之ヲ解ケリ一千四百五十一年ノ

新令ヲ以テ兵卒及ヒ附屬人員ノ法則ヲ定メ有土軍^{土地}
^{スル者ヲ以テ}ヲシテ公班尼多頓南ト其等ヲ齊カラシメ
 編制セシ軍^{タリ}然^氏有土軍ノ兵ハ常備ニ非スシテ其俸金ヲ與フル
 モ亦旗下ニ集マレル間ノミトス是查理第七兵制大改革
 ノ概畧ニシテ從來貴族ハ軍務ニ服スルノ特權ヲ有テシ
 ヲ奪ヒ庶民モ亦兵事ニ干與スルヲ得セシメシナリ茲
 ヲ以テ善ク王國ノ民ヲシテ雄大ナル侯伯ノ特權虐威ノ
 災ヲ免レシメ能ク内訌ヲ鎮壓シ直ニ諸ノ外政ニ應答ス
 ルヲ得タリ然^氏其風動モスレハ特治壓制擅制ニ傾ム
 キ且後代ノ諸王ヲシテ外征ノ功ヲ喜フ者多カラシムル
 ノ弊ヲ貽セリ蓋シ天下ノ事遂ニ一利一害ノ理ヲ免ル

一能ハサルナリ

此ニ因テ之ヲ觀レハ古昔已ニ常備兵ヲ設ケシハ佛郎西
人民ノ大幸ナリシト謂フヘシ且豫備軍ノ法ヲ設ケ時ニ
臨ミ兵ヲ募集スルノ法モ亦此常備ノ制ヨリ起リタル者
ナリ

兵隊訓練ノ要ヲ論セントスレハ忽チ常備兵設置ノ須要
小ナラサルヲ知ルヘシ往昔ノ訓練ハ特ニ身体ヲ練習ス
ルノミニシテ人民ノ兵トナル者ハ速ニ其技ニ熟セリ而
シテ戰鬥ノ手段甚タ陋劣ニシテ運動法モ亦簡易ナリ又
兵數寡少ニシテ之カ司令タル者其指揮法ニ熟スルヲ速
カナリ方令ニ至テハ兵卒ノ用ウル大小ノ兵器皆精巧ヲ

極メシヲ以テ未タ軍列ニ加ハラサル兵卒ハ其用法ヲ解
スルヲ能ハス士官ハ其奉職中演習及ヒ事務多端ナリト
雖氏猶其講究スヘキヲ常ニ饒多ナリ故ニ其講習ニ方テ
ハ分陰ヲ競フテ勉メサル可ラス蓋シ士官事ヲ執ル確實
ニシテ部下ヲシテ尊敬信服セシメ及ヒ其衆ニ擢テ人ヲ
制スルノ權ヲ保ツハ其學力如何ニ在ル可キナリ
軍紀ヲ維持スルヲニ於テモ亦常備兵ノ法ニ及フモノナ
シ古昔希臘及ヒ羅馬ノ時ニ當テハ共和政治ノ防禦ハ貴
族并ニ富者ノ專任ニシテ貧民自由ノ奴隸以テ埒奴一名
塞第孟ノ奴隸自由ノ奴隸ト真ノ奴隸ノ間ニ在ルモノニ
土人ヲ以テ奴隸ト為シ其子孫常ニ奴隸ニ沈メリ之ヲ名
ツケテ以テ埒奴ト云ヘリ羅塞第孟ノ奴隸トハ羅塞第孟ハ

士巴爾達都邑外ノ人ハ賤民トナシテ之ヲ除キ唯輜重ヲ
ノ通稱ナレハナリ
運送シ及之ヲ護衛スルヲノミニ用サタリ中古ノ時ニ至
リ有土ノ士ヲ以テ兵トシ奴隸陪臣ノ如キ徒歩ノ兵ハ算
シテ兵ノ數トナサス此時代ノ軍ハ人民社會中權有ル者
之カ將長タリ後此法ヲ廢セシヨリ轉覆乱起リテ國割壞
乱セリ

方今ハ凡ソ國ノ壯丁刑罰ノ辱ヲ蒙ラサル者ハ盡ク本國
ノ防衛ヲ以テ其義務トナシ而シテ其才幹ト知識ト膽氣
ト品行トヲ以テ門閥ヲ論セス皆高貴ノ武官ニ昇ルヲ
得且兵部ノ外ト雖氏才德備ハル者ハ亦文史ノ高官ニ登
ルヲ得ヘシ故ニ軍ハ即社會ヲ摸シ出セシ者ニシテ中

ニ社會ノ諸級族混合シ固ク相結契シ以テ其幸福ヲ致ス
ノ地ナリ夫レ斯ノ如クナルヲ以テ殆ト民族偏重ノ弊ヲ
一洗シ人民中其級族ヲ論セス相共ニ其志ヲ同ラシ身ヲ
委シ國ニ報センヲ思フヲトナリタリ蓋シ人民ノ高義
之ニ過ケルモノナシ上ニ首長ヨリ下ニ兵卒ニ至ルマテ盡ク
軍紀ノ要ヲ茲ニ取り或ハ敢テ法ヲ犯ス下無ク能ク艱苦
ニ堪ヘテ怨懟セス危險ヲ冒シテ恐怖セス以テ真ニ社會
保護ノ力ヲ基セス可キナリ夫レ軍ノ風斯ノ如ク盛且大
ナルヲ以テ或ハ之ヲ誹謗シテ軍ハ徒テニ人ヲ屈從セシ
メ及ヒ軍紀ヲ藉テ下ヲ凌虐スト謂フ者アリト雖氏亦齒
牙ノ間ニ置クニ足ラス此ニ由テ之ヲ觀レハ軍ハ廣大ナ

ル學校ト謂フヘキモノニシテ少壯ノ人民此中ニ於テ志氣ヲ養成シ報國ノ心ヲ振起シ名譽ヲ思ヒ愛國ノ情ヲ厚クシ凡テ高尚ノ思想胃裏ニ充滿スヘキナリ若シ之ニ反セハ人民中一人ノ隆盛幸福ノ生活ヲ得ル者無ル可シ夫レ斯ノ如キ區域ニ登レハ人民各個ノ私情ヲ離レ唯其心ノ存スル所ハ義務ニシテ而シテ甚企望スル所ハ各譽ナル可シ故ニ士官兵卒共ニ此二點ニ著目シ士官ノ智識ト兵卒ノ其身ヲ捧クルト其艱苦ヲ共ニシ緩急相援クルトヲ以テ之カ初ト為シ且其忠戰ヲ励マシ及ヒ軍紀不易ノ基本ト為ス者亦皆此二點ニ在リトス爰ニ論スル所ノ主旨ニ從ヘハ兵吏ハ政府及ヒ國民至計

ノ存スル所ノ者ニシテ而シテ一人及ヒ一國ノ幸福ハ一ニ其決定ノ當否ニ関ルヘシ會計監督希宇伯ノ説ニ軍ノ品位ハ軍人ノ風習ト其之ヲ建制スル法トノ良否ニ在リト故ニ軍ハ各國特別ノ編成ヲ用ヒ其國民ノ性情ノ善惡賢愚ニ由テ精否ヲナスモノトス馬ル門曰ク戦闘ノ時ハ兵員ノ多キヲ以テ第一トスト雖兵ノ精否ヲ論スルヲモ亦肝要トスヘキハ固ヨリ疑ヲ容レサル所ナリ然レ方今歐羅巴諸國ノ兵ヲ見ルニ兵員ト全手段トヲ以テ功ヲ助ケルヲ大ナリ然レ又未開ノ民ト戦フニ當テハ更ニ其状ヲ異ニス未開ノ民ハ訓練ノ法

無ク亦軍紀無ク絶テ隊勢編束ノ法無シ而シテ其為ス所
彼是合一セサルヲ以テ之ト對戰スルニ方テハ其兵ノ大
小相隔絶スルト雖モ能ク其隊伍ヲ整フルモハ常ニ捷利
ヲ得是則知識ヲ以テ兵器ニ代フルノ謂ナリ
此説ニ據レハ兵力ハ兵員志氣訓練兵器ノ四條ニ基ツク
ヲ知ルヘシ
拿破侖第一此事ヲ論シテ説有リ曰ク兵員數ニ及ハサル
軍ヲ以テ戰フモ或ハ砲隊及ク騎兵ニ乏シキ軍ヲ以テス
ルモハ全軍勝負ノ決ヲ取ルヲ避ケ進退ノ快速ヲ以テ寡
弱ノ損ヲ償ヒ運動法ヲ按排シテ砲兵ノ缺ヲ補ヒ陣所ヲ
擇テ以テ騎兵ニ乏シキ損ヲ償フ可シ凡テ斯ノ如キ時ニ

於テハ志氣ノ盛ナルヲ以テ之ヲ補フヲ多キニ居ル夫レ
兵ハ將賢ニシテ將校下士純良而シテ編成法ヲ得訓練善
ク至リ軍紀善ク整フテ嚴トレハ其意志ノ所向ニ拘ラス
必ス精兵トナル可シ又教法ノ崇信愛國ノ情本國ノ榮辱
ハ能ク未熟ノ兵ヲシテ志氣ヲ振ハシムルモノトス然モ
未熟ノ兵ハ以テ堅陣ヲ破ル可シ以テ我目的ノ成ヲ期ス
可ラスト
所謂志氣トハ何ソ伯埒古ノ説ニ志氣トハ更ニ意ヲ用
スシテ心氣ノ盛衰ヲ見ハスノ謂ニシテ即兵ノ恃頼ト恐
怖ノ二思想ナリ二軍相對スル時ニ方テハ常ニ彼此其志
氣ヲ同フスルヲ無シ必ス一軍ハ恃頼シ一軍ハ恐怖スル

モトトス而シテ一軍ノ恐怖ハ一軍ノ恃頼ト正ニ盛衰ヲ相為ス

此恃頼ノ心ヲ起サシムル法如何

馬爾門ノ説ニ據レハ踰令ニ信服シ服従ニ習ク自ラ恃

又人ヲ恃ムヲ以テ軍中志氣ノ初ト為シ兵ノ品位ハ凡テ

之ニ基イヌ

恃頼心ノ能ハ如何

凡テ一タニ戰陣ニ臨ミシ者ハ戰鬪ニ最貴重スヘキハ恃

頼心ニシテ其戰ノ成敗ハ專ラ之ニ基ククモノタルヲ

覺ルヘシ入委斯迷曰ク兵ノ力ハ兵士ノ思想ニ在リト武

如ハ更ニ一歩ヲ進メテ曰ク常ニ思フ恃頼心ノ力ハ体力

ノ上ニ在リトス

斯ノ如シト雖モ恃頼心ノ盛衰ヲ察スルハ戰鬪規則ノ

得テ知ル所ニ非ス蓋シ人心ヲ察スルハ軍術中高遠ナル

一術ナリ故ニ此術ヲ得ル者ハ則名將ナリ彼ノ漢尼哈塞

撤、並德黎弟二拿破倫第一ノ如キハ大ニ此術ニ於テ得ル

所アリシト今果シテ其如何ヲ究メント欲セハ此四雄軍

功名譽ノ一世ニ於テ其危急ノ際ニ處シ麾下ニ傳告セシ

詳令ヲ讀ム可シ其文短約ニシテ力有リ之ヲ見レハ自ラ

發明スル所有ルヘシ然モ此事ハ論説ノ得テ網羅スル所

ニ非サルヲ以テ更ニ詳ニ解クヲ得ヌ唯今説ク所ヲ以

テ觀レハ軍ノ大小訓練及ヒ戰鬪ノ法相異ナラサル者相

對シテ戰フニ方テハ其勝利ノ飯スル所ハ志氣最盛ナル者ニ在ル可シト云フノミ且軍ノ志氣盛ナレハ他ノ事故ヲ以テ致セル敗算ヲ救フコトヲ得可キナリ
上ニ馬ル門ノ説ニ批テ論述セシ軍ノ品位ノ説ヲ照ラシ而シテ軍ノ志氣ニ関スルコトハ凡テ之ヲ省クルハ以下説クヘキ所ノ者ハ軍ノ兵負訓練應用ヲ確實ナラシムル法ヲ明ニスルニ在リ然リ而シテ此三事ハ實ニ兵學教程ノ眼目ナリ

第三章 兵學

學術トハ凡テ人一事ヲ成ラント欲シテ施ス術ノ集リタル者ナリ故ニ兵學ハ戰爭ヲ作スノ目的ヲ以テ兵ヲ準備

スル法ヲ教ユルヲ其主旨トス馬ル門曰ク兵學トハ一群ノ兵ヲ統御シ之ヲ編成シ之ヲ運動セシム之ヲ戰鬥ニ赴カシメ及ヒ其素質後出フヲ精絶ナラシメ而シテ其保存ナレテ善ク至ラシムル為メニ必要ナル事ヲ知ルニ學ナリ
亦ニ軍術ハ軍術ト則兵學ナリ其實地ニ施ス上ニ就テ謂ハ云フ地皆有リト云フハ絶テ異論ナレト雖此術ノ學ニ於テハ然ラス抑學トハ何ヲ謂フカ曰ク學トハ其事ノ何クルヲ論セス人ノ知り得タルコトヲ知ルナリ然レ其主トシテ指ス所ハ己ニ其工夫ヲ實事ニ驗シテ法式ヲ立テ自ラ一科ノ學術ヲ為スモノニ在リ故ニ軍術ニ於テモ其學有ルヲ瞭然タリ然ラハ則此學ヲ得ルノ法如何曰ク之ヲ

得ルノ法ニ説有リ其一ハ唯自己ノ練磨ヲ以テ發明スヘ
シト云ヒ他ノ一ハ古来ノ事蹟ヲ觀先哲ノ跡ヲ鑑ミテ講
究スヘシト云ヘリ

斯ノ如ク正ニ相反スルニ説ノ間ニ於テ其當否ヲ決セン
ニハ徒ラニ贅辯ヲ費サンヨリ寧口世人ノ信服スル名將
大家ノ説ヲ引クノ愈レリトスルニ若カサルナリ

拿破侖第一曰ク軍術ハ決シテ戾ル可ラサル理ニ拠ル者
ナリ凡ソ戰爭ハ万事計畫ニ由ラスシテ得ル者ナシ故ニ
其精思熟慮ニ基カサレハ絶テ功ヲ為ス_ト無カルヘシ古

來名將ノ大功ヲ立テシヲ觀ルニ善ク軍術中自然ノ規則
ヲ守リ及ヒ其固有ノ理ヲ失ハス其謀慮精密ニシテ其手

大小ハ成功ノ大小ト相應シ而シテ其勞逸ハ障碍ノ
難易ニ相適セサルハ無シ或人非常ノ膽畧ヲ用キテ非常

ノ功ヲ奏スル有リト雖凡皆茲ニ基セサル無シ其戰事ヲ
為_スマ常ニ之ヲ以テ真ノ學識ヲ求メテ已マス是其為ス

所後世ノ名鑑ト為リ令人ト雖凡之ニ倣摸スレハ其伎倆
其人ニ追ツク_ト得ヘキ所以ナリ故ニ亞歷山德漢尼哈

塞撤幾斯達非亞德非米連内歐絶内非德黎ノ戰記ヲ反覆
熟讀シ以テ之ニ法ル可シ是實ニ名將ト為リ兵學ノ奧義
ヲ究ムル無ニノ良法ナリ故ニ此法ニ據テ其才思ヲ發揮
スレハ必ス此大家ノ為ス所ニ敵抗スルノ法ヲ覺ル可シ
吳比安聖西尔モ亦此事ヲ論シテ曰ク兵ヲ學ハ、宜シク

古今ノ戰例ヲ熟察シ以テ其學識ヲ擴ム可シ就中近世ノ
者ノ最善シトスト今ヲ距ル一_ハ百餘年前大將撒古ノ_ヲ談
ニ當時ノ戰爭ニ於ケル謬誤ヲ論シテ曰ク當時軍術ノ誤
多キ病ノ由テ來ル所ハ當時ノ人高遠ノ域ニ至ルヲ志ス
者少ナキ所ニ在リ憶フニ今ノ人其學ヲ所僅ニ兵ノ運動
法ニ止リ所謂兵學ナルモノハ此外ニ出テスヲセリコ、
ヲ以テ一旦軍ノ司令ト為ルニ方テ事皆新ニシテ無學ノ
人ニ其ナラス是其當ニ識ラサル可ラサルヲ遺シ其僅
ニ識レル者ヲ以テ為セシナリ
斯ノ如クナルヲ以テ軍術ノ巧拙ハ其講習ノ法ニ由テ起
ルモノトス且諸將長ク_ニ者ハ固ヨリ此講習ノ法ニ諸

セサル可ラサルナリ武如曰ク豫ノ兵理ヲ講究セスシテ
危急ノ際之ヲ應用スルヲ得ヘキヤ曰ク否大事ニ臨ミ
決シテ之ヲ妄斷ニ附ス可ラス必ス事々其據ル所有テ為
ス可キナリ凡テ戰爭ハ豫ノ察ス可ラサル者固己ニ多シ
況ヤ沉着シテ之ヲ推考スレハ知ル可キ者ヲモ猶之ヲ探
究セサルニ於テヤヤ
講學ノ事ハ肝要ナリト雖_ニ實地ノ演習モ亦缺ク可ラス
蓋シ講學ト演習ニ無_キ熟スル者真ノ良將ト謂フヘキナ
リ人朱連内ニ馬利安達_ルノ敗績ノ因ヲ問ヒシ時朱連内
答テ曰ク余此戰ニ敗レシハ實ニ余カ過ナリ然_レ若シ人
敗軍ノ過ナシト云ハ、蓋シ其人ハ久シク戰ヲ為サ、ル

者ナリト案スルニ戦争ハ過無キヲ又兵學ノ裨益大ナリト雖モ若シ一定ノ法ヲ以テ推サントスレハ其學ヲ所偶以テ危害ヲ招クニ足ル可シ故ニ拿破侖曰ク戦争ハ即智術ナリ戦争ノ事ハ一トシテ意外ニ出テサルハ無シコトヲ以テ苟モ指揮官タル者クトヘ全軍方策ヲ趣ニ從フヘキモ終始事ノ不意ニ出ルニ應シテ之ヲ轉シテ利ト為ス可キニ着目スヘシ是則智ノ本体ナリ凡テ其為サント欲スルトニ於テ思慮ヲ三分ノ二トシ膽氣ヲ三分ノ一トスヘシ若シ思慮過クルキハ猶豫ニ陥リ膽氣勝ワキハ無謀ニ陥ルヘシ馬爾門亦同論アリ曰ク軍ヲ指揮スル方畧ノ大綱ハ繁多ナルニ非スト雖モ其之ヲ施サントスルニ

リテハ百事輻湊ス是皆之ヲ先見シテ預メ之ヲ處方ヲ立ル能ハサルモノトス又曰ク善ク其目的トスル所ヲ考ヘ之ヲ履スル所以ノ方ヲ求メ然ル後其用ヲテ其目的ヲ達スヘキ良策ヲ求ムヘシ蓋シ其處方已ニ定マレハ其施行ヲ為ス者ハ智術ニシテ即所謂軍術ノ在ル所ナリト此諸説ニ據テ之ヲ觀レハ其講學ニ偏スルト練術ニ偏スルト共ニ取ル所ニ非サルヲ知ル故ニ戦争ノ指揮ヲ為スニ久シク講學ヲ廢シ唯實地ニ於テ功ヲ經シ者ト絶テ實地ノ研究無ク唯紙上ノ辛苦ヲ重ネシ者ト共ニ得ル所無カルヘシ然レモ若迷尼ノ説ニ軍人及ヒ人民中或ハ其國兵學講習ノ道開ケス或ハ其風俗之ヲ講スルヲ以テ急ト

セサルヲ以テ軍術ノ得失ヲ論スルヲ好マサル者ハ不幸ノ民ト謂フヘシ按スルニ若達尼ハ實地ノ研究ヨリ講學ヲ重シトスルナリ
夫レ兵學ハ其由テ成ル所ト其發見スル功用トヲ視ルニ其學者ニ裨益アルト絶テ疑フ可ラサルナリ故ニ苟モ兵ヲ指揮スル者ハ須臾モ其講習ヲ怠ル可カラズ而シテ其之ヲ知ルノ深キニ應シテ兵學ハ人類ノ思想及ヒ社會ノ現存ノ為ニ發スル至計ノ存スル所ナルヲ覺ルト益審ナルヘシ故ニ若シ軍ノ指揮ヲナス者其任スル所ノ大任ヲ思ヒ國民ノ之ニ望ヲ託スルヲ見其特別ノ權威ヲ有ツノ時多キヲ考ヘ數万ノ人民其性命ヲ委託スルトヲ思ヒ若シ其事ヲ詳ニセサルカ或ハ意ヲ注カサルキハ災害ノ測

ル可ラサルヲ首ニ功有レハ賞典ノ榮譽ヲ得ルヲ思ヒ而シテ其戰陣ノ必勝ヲ以テ其目的ト為セハ其淬勵刻苦スルハ固ヨリ其分ナリ而シテ若シ兵學ノ關涉スル所廣大ニシテ其淵涯ヲ知ル可ラサルヲ以テ之ヲ觀レハ士官タル者唯一劍ヲ帶フルヲ以テ足レリトセス必ス才畧ト知識トヲ具ヘサル可ラサルヲ悟ルヘシ蓋シ勞思苦慮スルハ才畧ヲ發達セシムル所以ニシテ而シテ知識ヲ廣ムルハ學ヲニ若クナリ凡テ士官タルモノ軍ノ威カヲ堅確ナラシムルヲ終始心ニ忘レサルハ即チ國ノ隆盛幸福ヲ来ス所以ナリ

第四章 兵學教程ノ説

拿破侖第一曰、國家智識ノ士官ヲ得ント欲セハ教育ニ
心ヲ用キ其學識ヲ涵養セサルヘカラス而シテ其學得
クル知識ヲ陸軍及セ海軍ニ活用スルヲ猶他ノ諸術ヲ耕
作及ヒ人類其他活物ノ保存ニ及ホスカコトクナルヘキ
ナリ

歩騎ノ二兵ハ其功力兵士各己ノ精練ヲ以テ最肝要トス
ルカ故ニ後來此二兵ノ將ヲ教育スヘキ學校ヲ建設セン
ニハ宜ク此說ヲ以テ目標トスヘキナリ

兵學校諸教程中兵學ヲ以テ第一等ニ置ク可シ且此事ニ
於テハ將官會議ノ說有リテ之ヲ上申シ一千八百七十三
年第八月六日ヲ以テ陸軍卿之ヲ布告セリ其說ニ曰ク兵

學ハ聖西爾學校ノ教程中ノ最肝要ニシテ最貴重スヘキ
所ナリ故ニ之ヲホニ警フレハ兵學ハ幹ニシテ其他ノ教
程ハ枝ナリ又兵學ハ人ノ武人ト為ル根本ニシテ今日兵
學校ヲ設クル所以ハ專ラ此學ヲ教フルニ在リ而シテ此
學ノ據テ成ル所ノ者ハ生兵學野戰要務要塞勤務ヨリ陣
線ノ機動ニ至ルマテ其規則ヲ研究シテ之ヲ實地ニ施スニ
在リテ砲兵學築城學給養學地學地理圖學ヲ以テ之カ補
助トナシ治ト無ク乱ト無ク一切ノ兵事ヲ該ヌヘシ而シ
テ戰記ヲ讀ミ兵用文章學ヲ修ムルヲ以テ此學ノ終トス
夫レ兵學ノ為ニ開ク所ノ境界斯ノ如ク廣大ナルヲ以テ
凡ソ兵事ノ此中ニ在ラサル者無カルヘシ故ニ兵學ヲ教

ユルニハ其業ノ難易ニ應スル時日ヲ與ヘ生徒ヲシテ其
學ヲ講スルト之ヲ術ニ施スト齊シク精熟シテ全ク其固
有ノ如クナラシムヘシ然ラサレハ聖西ル學校及第ノ士
官ト雖ル其聯隊ニ入りタルキハ更ニ新ニ研究ヲ為サ
ル可ラサルナリ

其教程左ノ如シ

- 其一 本来ノ軍術 戰例ニ據リテ戰則ノ用法ヲ試ム
- 其二 野戰ノ記 其事由ヲ提出シテ兵理ノ應用ヲ教ユ
- 其三 兵學ノ記 太古ヨリ今日ニ至ルマテ軍術ノ進
歩ヲ説キ甚ク戰記ニ近キ者ニシテ則戰爭ノ略記ト謂
フヘキモノ

上ニ説リ所ニ據レハ兵學ハ軍ヲ設置シ編成シ規制シ保
育シ訓練シ準備シ及ヒ之ヲ指揮シテ戰鬥ニ用ウル法ト
手段ヲ兼テ教ユル者ナリ而シテ此數ノ者ヲ類別シテ二
部トス

其一 兵制 軍ノ編成ト建設ノ事ニシテ即軍ノ設置
軍紀編束保育ノ規則ヲ説ク

其二 軍術 軍ノ訓練準備指揮ヲナシ及ヒ之ヲ戰ニ
赴カシムル法方ヲ説ク

會議ノ報告ニ據レハ此類別ノ法ニ從ヒ兵學ヲ分ツテ四
部トシ其二部ハ第一年ノ生徒ニ教ヘ他ノ二部ハ第二年
ノ生徒ニ教ユヘシトセリ故ニ以下教章類別ノ事ヲ詳説

シ且此會議ニ於テ決シタル衆說ノ主旨ヲ明ニスヘシ
第一章 第一年ノ教程

第一年ノ教程ハ若シ戦争ノ形勢ニ由リ生徒ヲシテ期年
ノ来ルヲ待タス早ク學校ヲ肄セシムルキ皆聯隊ニ入テ
真ニ少尉ノ職務ニ堪ユヘキ伎倆ヲ具ヘシムルヲ以テ目
的トス

此教程分ツテ二部ト為ス

伊 第一部

會議ノ說ニ曰ク兵事ニ猶他ノ諸術ノゴトク宜シク簡ヨ
リ繁ニ近キヨリ遠キニ及ホスヘシ故ニ先ツ各兵種ニ就
テ初ホノ說ヲ最精密ニ示スヘシ是後ニ三兵連合ノ戦法

ヲ學フノ初トス次ニ各兵種ノ戦法ニ移リテ其固有ノ得
失ト功用トヲ詳悉シ而シテ後諸兵連合ノ戦法ヲ論ス可
シ凡テ兵制得失ノ事ヲ説カスト雖此兵制編成法ト并
ニ行ハル、状如何ヲ詳カニセサル可ラサルナリ

此主旨ニ基ツキ教程ノ第一部ヲ十教トシ而シテ此十教
ヲ以テ教ユル者左ノ如シ

教程ノ端緒 提要及ヒ説解

軍ノ編成 兵制

歐羅巴諸大國編成ノ法ヲ學ヒ之ヲ我國ノ兵制ニ比較ス

呂 第二部

第二部ニ至レハ全ク小方策ノ事ニ從事ス會議ノ說ニ生

徒稍兵事ニ習フト雖氏未ク實驗ノ功アラズ故ニ題ヲ設
ケテ實事ヲ示シ生徒ヲシテ自己ノ工夫ヲ以テ之カ處法
ヲ立テシムヘシト此規則ハ嚴ニ之ヲ行ヒ凡テ兵理ヲ講
スルハ夥多ノ戰例ヲ引テ其利用ノアル所ヲ知ラシムヘ
シ又其教程外ニ屬實地ノ演習ヲナシ諸小方策ニ於テ屬
長ノ任スル緊要ナル諸務ニ精熟セシムヘシ
此部ノ教程ハ分テ二十教トス其目左ノ如シ

小單位戰術ノ講習

戰術上地形利害ノ說

小單位ノ宿營及ヒ警戒法

小單位ノ行軍及ヒ警戒法

小單位局地ノ景況ニ應スル戰法

小單位ヲ以テ施ス枝策

第二章 第二年ノ教程

第二年ノ教程ハ成業ノ教育ニシテ生徒其學校ヲ出ルニ
方テ軍術ノ高遠ナル事ニ於テ其知識ヲ審確ナラシムル
ナリ而シテ其主旨ハ生徒ヲシテ軍ノ高官ニ登ル可キ器
トヤラシメ他日其職ニ當レハ直ニ事ヲ辨シテ其任ヲ全
フセシムルニ在ルナリ

此教程モ亦分テ二部トス

伊 第三部 初年ノ教程ヨリ次第ニ

會議ノ說ニ云ク第三部ニ至テハ旅團師團軍ヲ以テ敵前

ニ於テ方策ヲ施スノ道ヲ教ヘ先ツ簡易ナル者ヲ以テ始
 メ本戰ノ事ヲ以テ終トス然レ大戦術ハ學校ニ於テハ地
 形ニ從テ其兵理ノ應用ヲ試ムルヲ得サルヲ以テ其奧義
 ヲ講究セシムルヲ能ハス唯漆板ニ圖ヲ示シ且其圖ヲ大
 ニシテ兵ノ運用法ヲ明瞭ナラシメ以テ其趣ヲ會得セシ
 ムルヲ以テ限リトス
 第三部亦二十教ニ分テ左ノ諸條ヲ教エ
 歩兵騎兵砲兵ノ大單位各別ノ戰法及ヒ三兵連合ノ戰法
 ヲ講ス
 往昔ヨリ今日ニ至ルマテ大戦術逐次變革ノ畧説
 大單位ノ宿營及ヒ其警戒法

大單位ノ行軍及ヒ其警戒法
 布陣及ヒ戰闘
 大單位ヲ以テスル枝策
 大戦ノ講義
 呂 第四部
 第四部ハ分テ十五教トシ其五教ヲ兵畧學トシ其十教ヲ
 以テ一二古戰ノ記ヲ授ク
 會議ノ報告ニ見エシ如ク聖西尔學校ト雖レ生徒ヲシテ
 兵畧學ヲ講シテ其淵源ヲ究メシムルヲ能ハス故ニ唯生
 徒ノ思考ニ階梯ヲ與ヘ能ク一役ノ趣ヲ了解セシメ之ヲ
 地圖上ニ會得スルノ力ヲ養ハシムルノミトス而シテ之

ヲ教ユルニ先ツ一役ノ準備ヲナスコトヲ以テ其初トス是
未熟ノ生徒ヲシテ戦争ノ初ニ於テ見ル所ノ諸難事ヲ詳
カニセシムル為メ肝要ナル教章ナリ而シテ此教章ハ有
名ナル諸役ノ事ヲ講スルヲ以テ缺ク可ラサルトス蓋
シ之ヲ講スレハ講習ト連屬スル實地ノ事ニ於テ常ニ發
明スル所多カルヘシ其之ヲ講スルニ方テハ漆板ニ山脈
及ヒ大河ノ流域ノ會戰地ニ在ル者ヲ畫シ而シテ地圖ニ
就テ戦争ノ地ヲ指點ス爰ニ於テ史學地學地理圖學給養
學築城學砲兵學等聖西爾學校ニ於テ教ユル教程ノ大半
始メテ其功用ヲ見ハス可シ抑此教章ハ殊ニ肝要ナル所
ニシテ戦争ノ講義ヲ為スコト少クモ十回ヲ下ル可テス且

我兵制ノ記ハ戰記ノ教章中ニアラサルヲ以テ之ヲ茲ニ
加フヘキナリ馬爾門既ニ此事ヲ論シテ曰ク教育ノ要ハ
最有名ナル戰ヲ講スルニ在リ而シテ講習ノ要ハ事跡ノ
得失ヲ察スルニ在リ故ニ其謀慮ノ至レルト粗暴ニ陷リ
シ所トテ詳カニシ以テ其勝ヲ得シ所以ト敗ヲ取リシ所
以トテ求ムヘシト以下説ク所ハ此大家ノ論旨ヲ確守ス
ルヲ務ムヘシ
是ヨリ兵學ノ説ヲ為スヘシト雖兵學校ニ於テ教アル
地學地理圖學法度學給養學築城學砲兵學ノ如キ凡テ兵
家ノ學ヲヘキコトハ讀者ノ既ニ識ル所ト為シテ別ニ之カ
説ヲ為サス

第二篇 國軍ノ制度

上文ニ軍ハ其之カ原質トナルモノト建制ノ法トノ良否ニ因テ其品位ノ高下ヲ致スヘシト云ヒ又軍ハ古今常ニ國民社會ヲ摸シ出セル者ノ如シト謂ヘリ今講習ノ為ニ之ヲ論考シ古今ノ歴史ヲ通讀シ其記スル所ノ説ヲ引テ證トシ國ノ兵制ヲ立ルニ其法如何スヘキヤヲ論シ然ル後方今佛郎西ニ行ハル、兵制ヲ説キ及ヒ之ヲ歐羅巴諸大國ニ比較シテ其如何ヲ詳カニスヘシ

第一章 陸軍卿

方今諸國皆陸軍卿ヲ置キ武官ノ高官トシ其國主之ヲ命シ又之ヲ易置シ及ヒ其名ヲ以テ事ヲ執ラシム

陸軍卿ハ軍ニ關係スル法則ヲ行フ上ニ於テ獨リ全權ヲ握リ國主或ハ大頭領ニ代テ事ヲ執ル者ナリ其任スル所ハ此法則ヲ創制シテ國民總代ニ對シ衆議中ニ於テ之ヲ維持スルニ在リテ陸軍ノ編成、兵制、教育、勤務ヲ統ヘ万事ヲ主宰ス

陸軍卿ハ軍ノ總裁ニシテ軍事ニ於テ國ノ首長決定シテ出セル令詞ニ捺印スルノ權ヲ有テ陸軍ノ法度ヲ維持スルトニ於テ政府ト民會ニ對シテ其責ニ任ス又法ヲ布キ規則ヲ定メ決議ヲ發スル官徽ヲ公布シ且其事ノ必ス行ハル、トニ注意ス而シテ戰時ハ陸軍卿ニ任スル事務ノ一部出征ノ軍隊ヲ指揮スル主將ノ手ニ在リトス

陸軍卿ハ給養ノ事ヲ主宰シ其省ノ費用ノ為メニ預メ定額金ヲ備ヘ又其職掌ノ權内ニ在ル金額ヲ用テ陸軍全局ノ用品準備ノ法方ヲ指揮シ總會計ヲ為シ之ヲ會計ノ本帳ニ記シ其費用ヲ審明ニシ以テ民會ノ檢證ニ供ス然レ戰時ニ在テハ給養ノ一部出征兵隊給養ノ將官ニ領任ス陸軍卿ハ凡テ其事務ヲ為スニ輔翼ノ官アリテ其号令告諭ノ文ヲ創草シ之ヲ書記シ及之ヲ傳送ス又各兵種各軍務ノ為メニ給養本局ニ於テ各一局ヲ設ケテ其事務ヲ執ル

又陸軍卿ニハ右ノ外哥米底ゴミチ公密臣コヒツシ議共ニ會ニ建議會ヲ屬シテ國ノ防禦軍ノ編成給養及々各兵種各勤務ノ給養ニ関

カル諸事ヲ議セシム抑陸軍省ヲ置キシ初メヲ原スルニ第十六世期ノ末葉ニ起レリ當時陸軍卿ノ職掌ハ僅ニ給養ノ事ニ止マレリ我佛郎西始メテ路波瓦氏ロバワヲ以テ陸軍卿ト為セシヨリ諸國皆我國ノ法ヲ模擬セリ一千七百九十四年ニ至リ陸軍省ノ事務ハ全權ノ三局ニ分レタリ然レ此法永ク存マス一千七百九十五年ニ至リテ廢止セリ一千八百二年ヨリ一千八百十五年ニ至ルマテ拿破侖第一兵ノ督理ト司令ヲ兼テ國ノ二秘局ヲ併掌シ一ハ以テ戰爭ノ吏ヲ主宰シ一ハ以テ給養ノ事ヲ統轄セリ一千八百十五年以後此併掌ノ法ヲ廢シ方今ニ至テハ陸軍卿ノ職掌ハ諸國皆殆ト

一齊トナリタリ

第二章 軍ノ編成

第一條 素質ノ建設

馬尔門曰ク國ニ軍在ルハ固ト自然ノ常理ニ出ツルニ非
ラズシテ人ノ作為ヲ以テ成ル者ナリ故ニ苟モ其編成ヲ
固フスヘキ所以ノ者一モ之ヲ忽ニスルキハ必ス其弊ヲ
免カレサルヘシ

夫レ軍ヲ編成スル所以ノ者ハ人負ト材料ナリ
人負トハ常備軍ト後備軍ヲ云フ而シテ軍人ハ自ラ分レ
テ二種ト為ル即幹部兵卒是ナリ
幹部トハ位階ヲ有テル諸武官ニシテ兵卒ヲ訓練シ階級

ノ位次ニ從テ司令ノ權ヲ有テリ幹部ハ其身分定マリ其
伎倆確實ニシテ其負衆多ナラサル可ラス凡テ此兵ノ精
良ナル軍ハ則精兵ト謂フヘシ

兵ノ現負トハ幹部ト兵卒トヲ合シタル現數ナリ然レ平
時兵卒ヲ旗下ニ集セシムルヲ戰時ノ如クナルヲ要セ
サルヲ以テ所謂現負ナル者ハ時々變化定リ無シトス平
時ハ幹部自ラ演習ヲ為スヲ得而シテ衆多ノ兵卒ヲ教
ヘテ速ニ成業セシムヘキ負ヲ以テ足レリトス戰時ハ其
為メニ備ヘタル男丁ノ身体強壯ナル者ハ盡ク軍列ニ加
ハルヘシトス唯其負數幹部ノ力ニ應シ且額金ノ多寡ト
勤務ヲ辨スルヲ要需ト相称ヲ可シトスルノミ

現負若シ寡少ノ極ニ在レハ之ヲ平時ノ負ト云ク若シ増
加シテ極度ニ登レハ之ヲ戰時ノ負ト云フ而シテ其平時
ノ負ヨリ戰時ノ負ニ轉スルヲ動負ト云ク戰時ノ負ヨリ
平時ノ負ニ復スルヲ復負ト云フ
料林トハ軍ノ保育ニ用ケル諸物即衣服飲食騎馬挽馬戰
闘ニ用ケル各種ノ用品ヲ云ク及ヒ此料材ヲ製造シ貯藏
シ保存スル為メニ設ケル建築モ亦併セ稱シテ料林ト云
フ
軍ヲ編成スル素質間ニ定メタル多寡ノ比例ト自然ニ定
マル者有リ而シテ此比例ハ時ノ形勢ト其期スル所ノ目
標トヲ以テ之ヲ變更ス故ニ其多寡ハ謾リニ之ヲ定ムル

ニ非ス全ク其素質ノ性質ヨリ起ルモノト知ル可シ

第二條 素質ノ區分

軍ノ能力ヲ逞フスル為メノ便利ト兵隊ノ戰闘ニ用ケル
手段ノ一ヲサルトヲ以テ編成ノ素質ヲ大分シテ三種
トス即參謀官戰負不戰負是ナリ而シテ此區分ハ工夫ト
經驗ノ結果ニシテ古今諸國ノ軍ニ於テ見ル所ナリ

伊 參謀官

參謀官ハ全軍計策ノ事ニ任シテ是ニ總參謀參謀部特別
參謀ノ別アリ

第一總參謀 此官ハ將官ノ任スル所ニシテ旅團師團
軍團ノ如キ大隊部ヲ指揮スル官ナリ

第二參謀部 此官ハ將官ノ輔佐ヲ為シテ其令詞ヲ草
シ之ヲ記シ以テ之ヲ頒布ス

第三特別參謀 此官ハ砲兵工兵給養ノ參謀ニシテ即
兵器ト勤務ノ事ヲ掌リ其之ヲ督理スル為メニ一二ノ
學術ヲ修メサル可ラス

歐羅巴諸國ノ軍ノ編成其規模殆ト備ハリシ時代ニ至ル
マテ參謀官ノ廢置常ナラサリシカ此頃ヨリ常備ノ制ニ
從ハント欲シ各兵種皆特別ノ參謀官ヲ置ケリ然ルニ一
千七百八十九年ノ革命乱ノ時佛郎西ニ於テ步兵騎兵獨
拉蒙ノ參謀官ヲ廢セシヨリ諸國次テ皆之ヲ廢シタリ方
今特別參謀官ハ唯其缺ヲ可カラサルモノ、ミヲ存シ而

シテ更ニ參謀部ヲ置テ總軍ノ便利ヲ取レリ

呂 戰負

戰負ニ相異ナル四兵種ノ別アリ
同一ノ軍服ヲ著シ同一ノ料具ヲ帶ヒ同一ノ兵器ヲ携フ
ル兵ノ集リタル者ヲ兵種ト云フ
步兵ハ徒歩ニシテ銃ヲ以テ射擊シ銃槍ヲ以テ衝突シテ
戰フ兵ノ集リタル者ナリ
騎兵ハ馬足ノ迅疾ヲ利用スル兵ノ集リタル者ナリ
砲兵ハ加農ヲ率ヒテ之ヲ使用スル兵ノ集リタル者ナリ
工兵ハ土地ヲ掘開シ及ヒ地雷ヲ填シ堡塞ヲ築キ或ハ敵
ノ堡塞ヲ破壊スル兵ノ集リタル者ナリ

歩兵ハ最古キ兵ニシテ希臘ヨリ羅馬ニ至ルマテ軍ノ主
兵タリキ羅馬帝國衰微ノ後第十五世期ノ中葉ニ至ルマ
テ主トシテ戰鬪ヲナス者ハ騎兵ナリキ此頃砲兵ノ用ウ
ル器具猶未タ盡サ、ル所有ルヲ以テ之ヲ第二等ニ置ケ
リ第十六世期ヨリ以來歩兵改良ヲ經テ方今ニ於ケルカ
如ク復々軍ノ主兵タランヲ務メ騎兵ハ大ニ其品位ヲ
落シ大砲ハ大ニ其功カヲ增加セリ工兵ハ初メ歩兵ノ一
種トセシト雖氏佛郎西ニ於テ之ヲ編シテ兵種ト為セシ
ハ一千七百九十二年共和政治ノ時ヨリトス
此四兵種中軍列ノ兵ト称スルハ初メノ三兵ノミトス故
ニ此篇工兵ノ説ハ唯論次コ、ニ及フキ僅ニ見ハル、ノ

ニ其他詳ナルヲハ學校ニ於テ教フル築城教程中ニ在ル
ヘシ

波 不戰負ノ勤務

戰負ハ將校ノ指揮ヲ受ケ不戰負ノ勤務ハ軍屬之ヲ指揮
シ或ハ武官ト權ヲ齊フシ或ハ然ラズ戰負ノ指揮ヲ任ス
ル者ハ其接スル所最危フシテ其名譽亦常ニ上ニ在リ然
レ軍中補助ノ勤務ヲ為ス者ト雖氏亦敢テ之ヲ賤ム可ラ
ズ旧史ヲ見ルニ軍ノ編成法真ニ其歩ヲ進ムレハ附屬勤
務ノ編成法モ從テ其歩ヲ進ムルヲ大ナリ蓋シ附屬勤務
ノ制其規模備ハリシハ一千七百八十九年革命以來ノ
ト見ヘタリ

不戰負勤務ノ制左ノ如シ

第一給養吏 軍ノ保育ニ用ケル諸物糧食料品ノ處分
及ニ準備ノ事ヲ掌リ且諸工人ノ指揮ヲ為ス

第二醫官及ニ獸醫 ニツノ者共ニ軍ノ衛生勤務ノ部
トシ而シテ醫官ハ看病卒ヲ役シテ軍負ノ病ヲ療シ獸

醫ハ鑣蹄工ヲ役シテ馬ノ治療ヲ為ス
第三從軍輜重隊 騎馬士官ノ從卒及ニ車輛一切ノ馭

卒ヲ供フ但シ砲車彈藥車ハ此外トス

第三條 素質ノ編束

軍ノ編成ノ基スル所ハ兵士相集テ相結契シ相親睦シテ
集結セル兵群及ニ單位ト為リ是ニ巧妙ナル機關ヲ施シ

其群中ノ諸部ヲシテ運動自在ナラシムルニ在リ然レ此

部ヲ以テ相為ス兵群自ラ尺度形狀大小ノ定限有リ是人

ノ伎倆及ニ其用ケル器械ノ功用限アルヲ以テ已ムヲ

得ナルナリ又此編成法中絶テ随意ノ字ヲ見ルヲ無ク反

テ一定不變ノ法ニ基クキタル規則ニ從フヘシ然レ要ス

ルニ其著目スル所ハ戰爭ヲ為スニ便ナラシムルニ在ル

ナリ

編成ヲシテ其法ヲ得セシメンニハ經驗ト工夫ヲ用井類

ヲ分テ次ヲ逐テ相連綴シ其編組ノ法至リ以テ一大兵團

ヲシテ長上ノ指揮ニ從ハシム可キナリ而シテ其連綴ノ

斷落ハ司令ニ任スル者其部下ニ對シテ一定不揚ナル社

長ノ權ヲ有ツノ順次ナリ而シテ之ヲ編組スルニ先ツ御
シ易キ小兵團ヲ編束シ之ヲ多ク聚メテ長上一人ノ下ニ
屬ス斯ノ如クスルキハ兵士一人ヲ以テ團中ノ單位ト為
サス却テ集結セル一團ヲ以テスコ、ヲ以テ大小各異ナ
ル兵團ノ司令相次テ列スル階級ニ從ヒ工ニ長上ヨリ下
モ兵卒ニ至ルマテ号令通達ス可キナリ而シテ此諸兵團
ヲ分テ二部トナス即小部隊大部隊是ナリ

伊 小部隊

小部隊ハ各兵種中隊形ノ初ヲ為ス小群ナリ即越高多達
密塞古臣密古臣或ハ彼羅頓公班尼拔隊龍越加多龍拔得
利聯隊是ナリ

一 越高多

越高多ハ編成ノ初本ニシテ諸兵種古今常ニ此區分ヲ為
シ之ヲ伍長或ハ騎兵伍長ノ下ニ屬ス而シテ伍長ハ軍秩
ノ初級ナリ
往昔羅馬ノ第古里隊ハ正ニ越高多ノ蹤例ニシテ司令一
人ノ下ニ六人或ハ八人ノ槍兵ヲ屬セシカ封建制ノ時皆
此法ヲ用ヰタリ

二 達密塞古臣

達密塞古臣ハ越高多二隊或ハ四隊ヲ合シ下士之カ指揮
ヲ為ス此編成法ノ確定セシハ第十八世期ノ末葉ニ在リ

三 塞古臣或ハ彼羅頓

彼羅頓或ハ塞古臣ハ達密塞古臣二隊ヲ合セシ者ニシテ
最下級ノ士官之ヲ指揮ス此隊ハ多ク戰術ノ二等單位ト
為ス之ヲ編成ノ常則ト為セシハ前世期ノ末年ニ在リ

四 公班尼

公班尼ハ步兵ニ在テ編成軍紀訓練給養ニ於テ真ノ素質
ト謂フヘキ者ナリ此隊ハ塞古臣二隊或ハ四隊ヲ合シ大
尉之カ司令タリ
公班尼ノ初ハ希臘ノ波蘭日隊中ノ神達迷隊羅馬ノ連熱
恩隊ノ馬尼不尔隊ヨリ起レリ查理第七佛郎西ノ常備兵
ヲ創制セシニ方テハ佛郎西弓隊ヲ三十二公班尼ニ分テ
一公班尼ヲ五百人ト為セシカ路易第十四及ヒ路易第十

五ノ時ニ至テ大ニ隊ノ現員ヲ減セシテ以テ後一千七百
八十九年ノ革命以來又新ニ之ヲ增加セリ而シテ其隊名
ノ存セシハ特ニ佛郎西ノニニ非ス諸國ノ兵皆然リ

五 拔隊龍

拔隊龍ハ戰鬪ノ素質ト為ル者ニレテ即通常ノ步兵戰術
單位ナリ蓋シ軍ノ運動ヲ為シ機動ヲ為シ戰鬪ヲ為スモ
皆此拔隊龍ヲ以テスルナリ
其隊ノ大小ハ一定セスト雖モ其司掌スル所ノ任ニ應ス
ヘキヲ以テ亦自ラ定限無クンハアラス蓋シ拔隊龍ハ運
動輕捷ナラサル可ラス又戰鬪間隊長ノ指揮アレハ全隊
ノ兵之ヲ見之ヲ聞クヲ得サル可ラス此二條ノ要旨ヲ

照シテ其隊ヲ成ス中隊ノ數或ハ各中隊ノ現員ヲ増減ス
ルヲ得ヘシ

士官ノ數ヲ兵卒ノ數ニ應セシムル度ハ從來ノ經驗ヲ以
テセシ定論ニ從フヘシ蓋シ士官ノ數衆多ナレハ從テ隊
ノ効力ヲ増加シ注意能ク至リ其熟練モ從テ速ナル可シ
然レ士官ヲ多クスレハ自ラ其位階ノ品位ヲ落シ且定額
金ノ數限り有ルヲ以テ其起ユ可ラサル定限ヲ定メサル
可ラス故ニ勤務ニ於テ缺クル所ナク而シテ理賤ノ道ヲ
失ハサルヲ欲シ兵卒四十人ニ士官一人ヲ用メ兵卒千人
ノ拔隊龍ニ士官二十五人ヲ用ウルヲ適度トス
一拔隊龍ノ兵千人ニ及ヘハ之ヲ二列ト為シ橫隊ヲ布ク

其ハ其正面極メテ廣大ナルヘシ然レ是從來ノ經驗ニ據
テ適度ト為ス所ニシテ其戰場ニ臨テ受クル所ノ死傷ヲ
以テ速ニ現員ヲ減スルヲアルヲ慮ルナリ蓋シ其現員ヲ
定ムル所ノ如クナレハ其死傷多キカ為メニ復戰ヲ可ラ
サル勢ニ陥ル患無カル可シ若シ千人ヨリ減スルキハ其
隊忽消滅ス可キナリ

希臘ノ巴蘭日ハレバニハ希臘ノ隊名四千八百人或ノ亞
齊隊シキ千人ヲ以テ羅馬ノ蓮熱恩レシヤン兵員三千人ノ古爾低隊コルト蓮熱恩
一ノ如キハ正ニ今ノ拔隊龍ト相類ス封建制ノ時步兵ハ
其編成法ヲ立テント欲シテ之ヲ公班尼ニ分テ用メタリ
然レ其現員漸クニ減シテ五十人ト為スニ至リ其合併ノ

カヲ逞フセント欲スルモハ其數隊ヲ聚ノサル可ラス故
ニ後世路易第十三ノ時拔隊龍ヲ編成シテ通常ノ戰術單
位ト為セシナリ然レ其定マリタル司令無キヲ以テ此編
成法ハ特ニ一時ノ權法ニシテ未タ不易ノ定法ト為ラサ
リシナリ而シテ其定法ト為リシハ一千七百九十二年革
命ノ時拔隊龍長ヲ創置セシ以來ノ事トス且此時ヨリ久
シカラスシテ諸國ノ軍皆此法ニ倣ヘリ

六 越加多龍

越加多龍ハ騎兵通常ノ戰術單位ナリ三彼羅頓或ハ四彼
羅頓ヲ以テ一隊トシ大尉之カ指揮ヲ為ス
越加多龍ノ司令ハ身士卒ニ先ツテ敵軍ヲ衝突ス故ニ之

ニ從フ士卒ハ其司令ノ指揮ヲ見又聞クヲ得サル可ラ
ス是其隊ノ大ニ限界ヲ立ル所以ナリ夫レ騎兵ハ編成
テ戰術ノ單位ト為スノ兵員寡少ナルカ為メニ編成軍紀
訓練給養ノ單位ニ於テモ亦然リ

騎兵其正面ヲ濶大ナラシムルモハ瑣小ノ障礙ニ逢フモ
忽其隊ヲ乱スヘシ從來ノ經驗ヲ以テ觀ルニ一越加多龍
四十八伍ノ者ハ其力乏シカラスシテ運動迅速ナリ然レ
戰場ニ出ツル者ハ六十四伍乃至七十二伍ノ者ヲ最良シ
トス其故ハ戰場ニ在テハ馬匹速ニ疲勞シテ用テ難キニ
至ル者多ク輕騎兵ノ如キハ其勞動殊ニ烈シク且其隊ヲ
支分スルヲ多クシテ速ニ弱小用テ難キニ至ルヲ以テナ

リ而シテ騎兵ハ二十五騎ニ士官一騎ト為シ百三十騎ノ
越加多龍ニシテ士官五騎ヲ充ツ可シ

古昔希臘及々羅馬ノ時ハ騎兵ノ用盛ナラス故ニ當時越
加多龍ニ類スル編成有リシヲ聞カス希臘ノ以^ル隊羅馬

ノ^ミ朱米隊ト稱スル者ハ後世ノ彼羅頓ノ如クナルニ過キ
ス封建制ノ時ニ當テ^{シエバリエール}勲級士各己ノ戰ヲ為スヲ以テ騎兵

ノ兵團ハ槍兵隊ノミナリキ後騎兵戰法ヲ改革セシニ及
テ始メテ公班尼ヲ編成セリ其初ハ現員強大ナリシカ久

シカラスシテ其員ヲ減セリコ、ヲ以テ其隊ヲシテ強固
ナラシメンニハ數隊ヲ合セサル可ラサリシナリ故ニ越

加多龍ノ初ハ蓋シ此頃ニ在ルナラン之ヲ第十七世期ノ

初ト為ス然^ル是唯臨時ノ編成ナルノミ其之ヲ以テ常則
トセシハ一千七百八十九年ノ革命ノ稍前ニ方リ佛郎

西ニ於テ越加多龍長ヲ創置セシヨリ起リテ次テ諸國我
國ノ例ニ倣ヘルナリ

七 拔得利

砲兵戰術ノ單位ハ拔得利ニシテ三塞古臣或ハ四塞古臣
ニ大砲六門或ハ八門ヲ備ヘタル者ナリ而シテ拔得利ハ

其現員少シト雖^ル獨立シテ出ツル^ル多シ故ニ編成訓練
給養ニ於テモ亦之ヲ以テ單位ト為ス實ニ砲兵ハ戰闘ヲ

為シ及々機動ヲ為スニ皆此隊ヲ以テス砲兵ハ大略大砲
二門ニ士官一名兵卒三十人馬三十六匹車四輛ニ附屬勤

務ノ者盡ク之ニ属ス

砲兵拔得利ヲ戰術ノ單位ト為シ騎馬セシメシハ額利慕

巴法ノ出テシ時額利慕巴ハ一千七百十五年ヲ以テ生レ

術ノ大家ニシテ大ニ砲兵ノ改革ヲ為ニ起レリ然テ其人

負ハ大砲ヲ使用スル兵ノミナリキ而シテ之ニ馭卒ヲ加

ヘシハ拿破侖第一ナリ是ヨリ以後歐羅巴諸國ノ拔得利

戰術上ノ編成殆ト一齊ト為リタリ

ハ 聯隊

拔隊龍越加多龍拔得利各相集リタル者ヲ聯隊ト云フ而

シテ此聯隊中ニ在ル單位ノ數ハ給養ト理財ノ便ニ從フ

トトス

聯隊ハ小部隊中ノ最大ナル者ニシテ則兵語ヲ以テ軍隊

ト稱スル者ナリ此隊ハ佐官之カ司令ト為リ隊中ノ教則

ヲ齊フシ會議ヲ立テ自ラ其議長ト為テ給養ノ事ヲ決ス

拔隊龍越加多龍拔得利ハ其聯隊中ニ於テ番號ヲ定メ各

聯隊亦其兵種中ニ於テ各番號ヲ定メ時トシテハ榮譽ヲ

標シテ別ニ名稱ヲ下スト有リ

兵ヲ編組シテ聯隊ト為スハ蓋シ編成大主意ノ在ル所ナ

リ馬ル門曰ク凡テ聯隊ハ給養ノ便利ヲ取テ編成スルヨ

リ外ナラスシテ愛國ノ情ト親睦ノ情トヲ以テ相結ヘル

一種ノ社會ノ如キ者ナリ故ニ大佐ハ此社會ノ長ニシテ

父ノ如ク又審官ノ如シ且大佐ハ固ヨリ武幹ノ第一等ト

稱スル膽氣ヲ涵養セサル可ラスト雖氏直ニ大佐ノ大佐
タル器量ニシテ其聯隊ヲ鼓舞作興スル所以ノ者ハ其勇
敢衆ニ絶スル所ニ非ラスシテ反テ法令ヲ假サス事ヲ處
スル方正ニシテ而シテ其思慮確然動カサル所ニアリ凡
テ精絶ノ聯隊ト稱スル者ハ其治轄ノ法皆斯ノ如クナラ
サルハナシ

古昔ハ兵士訓練ノ法ニ熟スルト容易ニシテ且其軍甚弱
小ナリシハ已ニ上ニ見ヘシカ如シ此頃ニ於テハ聯隊ニ
齊シキ隊ヲ編成スルト有リシヲ聞カス故ニ之ヲ古ニ求
ムルト雖氏得可ラス封建制ノ時ニ至テモ大抵然ラサル
ハ無シ而シテ佛即西ニ於テ弓兵ヲ創置セシ時ニ用サレ

隊形ハ實ニ今日聯隊編成ノ初ヲ為セシナリ近古歩兵聯
隊ノ始メテ世ニ見ハレシハ一千五百六十一年騎兵ノ聯
隊ハ一千六百三十五年砲兵ノ者ハ一千六百七十年ニ於
テシ此改革次第ニ歐羅巴全洲ニ及ホセシナリ

呂 大部隊

方今行ハル、大部隊ニハ二制有ツテ彼是同齊ナラス即
平時ハ訓練ノ一齊ニ進ムヲ以テ目的ト為シテ各兵種中
ニ於テ編組ス戰時ハ諸兵種ノ戰術單位ヲ混合シテ之ヲ
編組シ其戰闘中互ニ相援ケル力ヲ量ツテ其多寡ヲ定ム
故ニ大部隊ハ平時ハ其兵種ノ部隊タリ而シテ戰時ハ軍
ノ部隊タリ

大部隊トハ旅團師團軍團小軍大軍是ナリ

一 旅團

旅團ハ平時モ戰時モ常ニ一兵種中ノ部隊トス而シテ此
隊ヲ編成スル者ハ步兵騎兵砲兵ニシテ其司令ハ將官之
ニ任ス

希臘ノ巴蘭日羅馬ノ連熟恩及ヒ封建制ノ時ノ翼軍ノ如
キハ正ニ後世ノ步兵旅團ニ齊シキ者ナリ蓋シ始メテ真
ノ旅團ヲ編成セシハ幾斯達非亞得非ニシテ次テ宋連内
之ヲ完成セリ是ヨリ久シカラスシテ歐羅巴諸國皆之ヲ
用キタリ其騎兵ニ之ヲ施セシハ第十七世期ノ末ニ在リ
今世期ノ初ニ至テ日耳曼軍之ヲ砲兵ニ施セリ我佛郎西

此隊制ヲ砲兵ニ用キシハ特ニ近世ノ事ナリ

二 師團

師團ハ步兵或ハ騎兵ノ二旅團ヲ合セタル者ナリ此隊ハ
歩騎ノ二兵ニ限レリ而シテ其司令ハ將官之ニ任ス

平時ニ在テハ通例一兵種ノ部隊ナリ戰時ニ於テハ軍ノ
部隊ニシテ適合ノ多寡ヲ以テ諸兵種ヲ編合シ且盡ク附
屬ノ雜兵ヲ備ルトス

希臘及ヒ羅馬ノ軍ニ於テハ方今ノ師團ニ類スル隊制ヲ
見ス然レ封建制ノ時及ヒ第十八世期ノ中葉ニ至ルマテ
歐羅巴ノ軍ニ於テ己ニ里幾及ヒ巴臺ト稱スル臨時ノ編
成法ヲ用キ後一千七百六十年ニ至リ大將北魯幼始メテ

師團ヲ編成シ是ヨリ歐羅巴諸洲出征ノ軍皆此編成法ヲ用キ普魯士ノ如キハ一千八百十五年講和ノ後ハ昇平ノ日ト雖モ尚此編成ヲ存シテ戰時ノ法ニ異ナルトナシ我國ニ於テモ亦此法ニ從ヒシト雖モ常ニ師團ヲ立ルハ唯歩兵ノミトス是歩兵ハ其現數最多ニシテ治平ト雖モ猶大ナル隊ヲ編組シ得ルヲ以テナリ騎兵モ亦人員ヲ限リテ師團ヲ立ルト有リト雖モ特ニ一二ノ國ニ於テスルノ

三 軍團

兵一旅團及ヒ附屬ノ雜兵ヲ以テス此諸兵皆軍團ノ順序ニ從テ亦各其番号ヲ附ス希臘ノ大巴蘭日羅馬ノ公修軍及ヒ第十七世紀ヨリ第十八世紀ノ間ニ於テセシ大軍團ノ軍列中ニハ今ノ師團ト正ニ相同シキ者アリ破拿巴的一千八百年ノ役ニ始メテ之ヲ以テ編成ノ法ト為シ其帝位ニ登リシヨリ諸戰盡ク軍團ヲ用キタリ是ニ於テ歐羅巴各國盡ク之ヲ用ラルト為リシカ唯戰時ニ於テスルノミナリキ普魯士ハ獨リ平時ニ於テ猶此區分ヲ用キ夫ヨリ我國ニ於テモ他ノ一二國ト同ク普魯士ノ例ヲ繼ケリ常ニ兵ヲ分ツテ旅團師團軍團ト為セハ兵ヲシテ常ニ戰

時ノ頭長ノ指揮ニ習ハシメ且其動員ノ事ヲシテ簡潔ナ
ラシムルノ利有リ

四 小軍

小軍トハ二軍團以上ノ兵ヲ合セタル者ニシテ大將或ハ
皇族之ヲ指揮ス而シテ或ハ番号ヲ用キ或ハ更ニ名号ヲ
附シ或ハ地名ヲ以テ其名ト為シテ之ヲ區別ス
此編成ハ迄今ノ新制ニシテ稀ニハ平時ニモ用ウルコト有
リト雖氏多クハ戰時ニ限ルコトス
旧史ヲ見ルニ軍ノ部隊ハ軍術ノ進歩スルト軍ノ數增加
スルトニ從テ其數益加ハル者ト見ヘタリ故ニ拿破侖第
一ハ或ハ小軍ヲ用キシコト有リト雖氏親ラ之カ指揮ヲ為

サス而シテ其麾下ノ軍ハ之ヲ分ツテ軍團ト為セシカ方
今ニ至テハ戰車ヲ為ス諸國ハ全國ノ壯丁ヲ募集スルヲ
以テ軍ト軍團ノ間ニ更ニ一部隊ヲ置キ以テ號令ノ傳達
ヲ容易ナラシメ總軍ノ運動ヲ捷速ナラシメ及ヒ兵畧ノ
大計ヲ行フニ便ナラシメタリ

五 大軍

大軍トハ二小軍以上ノ兵ヲ合セタル者ニシテ大將皇族
或ハ國王親ラ之ヲ指揮ス
夫レ方今用ウル所ノ大軍ナル者ハ其戰士ノ數ノ多キト
編成ノ異ナルトヲ以テ往日ノ軍ナル者トハ全ク相異ナ
レリ

工ニ見ヘシカ如ク達密塞古臣ヨリ以テ大軍ニ至ルマテ
各部隊其次ナルモノ二個三個或ハ四個ヲ合セテ編組ス
ルトトス後戰術ノ條ニ至リ此編組法ヲ擇ビ用ウル要旨
ヲ論スヘシ故ニ今唯此諸法ノ便不便ノ理ヲ論スルノニ
夫レ兵隊ハ之ヲ編組シテ二單位ト為セハ二陣ト為スヘ
シ三單位ト為セハ三陣ト為シ或ハ唯一陣ト為シテ中央
隊及ヒ兩翼隊ヲ分ツヘシ四單位ト為セル者ハ多クハ二
陣ト為シ每陣之ヲ兩翼ニ分チテ中央隊ヲ定メス或ハ一
陣ト為シテ中央隊ニ兩翼ヲ附シ及ヒ預備隊ヲ備ヘテ後
援ト為ストヲ得ヘシ而シテ戰鬪ヲ指揮スルトニ着目シ
テ之ヲ觀レハ最終ノ編組法ヲ以テ最便ト為スヘキニ似

タリ然レ諸兵團皆常ニ此編成ヲ用ウルト能ハス是特ニ
幹部ヲ養フ費用ノ大ナルノニニ非ス人ノ伎倆モ自ラ定
限アルヲ以テナリ今唯此編組ノ異同ヲ示スノニニシテ
其得失及ヒ何ノ時ニ何ノ法ヲ如何シテ用ウヘキト云フ
ニ至テハ後ニ論スル所有ルヘシ

第三章 兵制

凡テ人世ノ社會ハ盡ク法ニ是抑リ以テ社中ノ制ヲ立ツ
ルトトス而シテ民制民主制教法政體兵制悉ク其基本ヲエ、ニ
取レリ
兵制ハ人民社會ヨリ其防禦者ニ義務ヲ課スル權ト其防
禦者ノ自由ヲ保護スル權理トヲ平分シテ以テ軍ノ編成

ヲシテ無窮ニ行ハレシムル所以ノ者ナリ
摩蘭得曰ク政府ト兵部ト相持スル所ノ權ハ一定不易ノ
法律ニ據テ之ヲ定メサル可ラス而シテ之ヲ定限スルノ
法ハ其約束ヲ嚴ニシ兵部ハ政府ノ為ニ職ヲ供シ而シテ
政府ハ兵部ノ功ヲ賞ス可シトス故ニ二者各其行フ可キ
趣旨ニ就テ立テタル基本ヲ講究シテ之ヲ体認セサル可
ラス

夫レ軍ノ保存ヲシテ堅確ニシテ不易ナラシムルハ其兵
制堅確ニシテ秀絶ナルニ在リ故ニ凡テ兵制完全ナル軍
ハ皆民情ニ基ツキ永世不易ノ法ニ頼ラサルハ無ク而シ
テ士人ハ多ク兵制ノ大旨ヲ會得シ其内外ノ敵ニ向テ義

勲ヲ養スルヲ思ヒ而シテ此大旨ハ則社會ノ法制ヲ基ス
ルヲ知リテ善ク之ヲ尊信シ其之ヲ奉スヘキノ時臻ルニ
及テハ敢テ或ハ違フコト無シ是ニ於テ軍ナル者ハ國內ニ
於テ別ニ一社會ヲ為スカ如クナラス反テ其他ノ人民ト
自然ノ親睦ヲ保ツヲ以テ其力ノ源ト為スハ秀逸ノ軍ト
謂フヘキノヲ知ルヘシ

兵制ノ目的トスル所ハ之ヲ要スルニ軍ノ諸部各其主ト
シテ任スル所ニ應シ勞苦スルコト無クシテ事ニ従フコト
得ルニ在リ而シテ之ヲ大別シテ編成法給養法ノ二法ト
為ス

第一條 編成法

編成法ハ國法ヲ立ツル者ノ採用スル趣旨ニ從テ定マル
昔トス其理ヲ詳悉センニハ宜シク法律書中ニ就テ之ヲ
求ムヘキナリ而シテ其編成法ノ主旨ハ專ラ兵ト為ル人
民ノ權理ト義務トヲ定メテ諸軍人ノ志氣ヲ振起スル所
以ノ者ヲ飽足セシムルニ在リ

此論意ニ從ヘハ編成法ハ人民社會ノ法ヲ設クル風ニ基
カサルヲ得ス故ニ其編成ノ趣ハ各國人民ノ性情ト人民
ノ兵役ニ就クヘキ法トニ從フノミナラス更ニ各國政体
ノ異同ヲ以テ異ナル者トス故ニ當今ノ軍ノ編成法ヲ盡
ク學ビ得ルハ實ニ甚易カラスコトヲ以テ編成法ノ說ハ
唯其最重大ナル者ト最廣ク涉レル者ノミヲ說キ且其說

實地ニ於テスル細目ニ及ハス却テ真ノ論理上ニ在テ之
ヲ論シ然ル後佛郎西ニ於テ之ヲ用ケル法如何又外國ニ
於テ之ヲ用ケル法如何ヲ詳ニス可シ

編成法建設ノ事ニ於テ最重スル者ハ三事トス曰ク徵募
賞典鎮壓是ナリ

徵募ハ軍ノ人負ヲ創設シ之ヲ繼續シ之ヲ換替スル為メ
ノ者トス

徵募ノ據テ以テ法ヲ定ムル所以ノ者左ノ如シ

- 第一 人民ノ多寡及ニ性情
- 第二 政府歳入ノ多寡
- 第三 國壤及ニ國界ノ位置并ニ地勢

第四 外國交際ノ状

人口ノ多寡ヲ以テ國民ヲ徵募スル負ノ極數ヲ定メ歳入ノ多少ヲ照シテ常ニ兵ヲ旗下ニ養フノ極數ヲ定ム可シ而シテ國境及ヒ國界ノ位置ト地势トヲ視テ以テ兵備ヲシテ或ハ其中等ノ度ヨリ下ラシメ或ハ之ヨリ上ラシム可キナリ一千八百十五年以來普魯士ハ其版圖ノ形状善カラス且國境ノ要害足ラサルヲ口實トシ其軍ノ大ナル常ニ人口多寡ノ比ヲ超ヘ其大志ヲ包蔵シ以テ其假面ヲ投シテ真面目ヲ現スヘキノ時ヲ待テリ又外國交際ノ状ニ亦同シク兵備中等ノ度ヲ凌ス可キヲ以テ方今開化ノ諸國ヲ視ルニ其兵備皆其國力ヲ超エ就中普魯士新ニ勝

ヲ得テ日耳曼帝國ヲ建テシヲ以テ諸國ノ軍勢ヒ其兵力ヲ增加セサルヲ得サルナリ
 古來諸國ニ於テ用サタル徵募法大概左ノ如シ

第一 外國ノ雇兵

第二 自國ノ雇兵

第三 壯兵

第四 定規ノ編入或ハ人民ノ一部ニ課シ或ハ全丁ニ

課ス而シテ此ニ法中又一部ノ編入ト全部ノ編

入トノ別有リ

往昔額爾達日ハ人民專ラ貿易ヲ業トシ金ヲ出シ希臘ヨリ兵ヲ雇フテ警備セシカ彪尼戰ノ時世人額爾達日兵ノ

驍勇ヲ恐レタリ又羅馬人兵ヲ發シテ必ス額爾達日ヲ攻
 滅セント欲スルニ當リ先ツ額爾達日人ヲ要シテ希臘ノ
 雇兵ヲ廢セシメタリ我佛郎西ニ此徵兵法ノ始メテ行ハ
 レシハ第十五世期ノ末ニ在リテ路易第十一佛郎西弓隊
 ノ創置セシ時反テ其人民ニ兵權ノ移ルヲ病ミ絶テ爭擾
 ノ宣ナク之ヲ解散シ代フルニ外國ノ雇兵ヲ以テセリ當
 時ノ雇兵ハ專ラ瑞士ノ兵ニシテ之ヲ雇フニ瑞ノ諸州所
 ニナニト條約ヲ為シ俸金ヲ與ヘテ雇フトトス然レ此條
 約屢破レテ改約ヲ為シ一千七百八十九年革命ノ公布有
 リシ頃猶瑞人ノ親衛兵有テ發斯低幼城ニ據リテ獨リ王
 國ノ遺臣ト為レリ佛郎西撰拔軍之ヲ圍ミテ力攻セシニ

其防禦頗ル勇猛ナリシト云ヘリ
 自國ノ雇兵ヲ用キシトハ往昔ニ未タ其例ヲ見ス我佛郎
 西弓隊ヲ解キ外國ノ雇兵ヲ用ウルノ法ヲ取リシ時始メ
 テ此法ヲ行ヒ遂ニ歐羅巴諸國ニ及ホセリ佛郎西第一
 巴比ニ於テ大敗シ西班牙ニ擒ハレシ後西班牙兵制ノ盛
 ナルニ服シ取テ之ヲ佛郎西ニ用サント欲シテ果サハリ
 シカ查理第五ノ帝國分裂セシヨリ西班牙ノ兵制忽チ衰
 敗セリ故ニ一千七百八十九年ニ至ルマテ歐羅巴諸國ノ
 兵制ハ皆雇兵ノ條約ヲ以テ外國ノ雇兵ヲ用キ他國ノ未
 奈人ヲ容レ及ヒ金ヲ以テ餌ト為シテ自國ノ雇兵ヲ釣リ
 以テ其軍ヲ建テシ者ト謂テ可ナリ後共和政治ノ時ニ至

テハ佛郎西軍ノ中ニ絶テ雇兵ナカリシカ一千八百五年ニ至テ徵兵更卒ノ中ニ復テ雇兵ノ如キ者有リテ此種ノ兵全ク絶ヘシハ一千八百七十二年以来ノトス而シテ其年々徵兵簿ニ據リ國民ニ兵役ヲ課スルノ法ハ一千八百十五年以來我佛郎西ニ於テハ之ヲ廢セシロ普魯士獨リ之ヲ循用シ一千八百六十六年及ヒ一千八百七十年ノ戰爭以來諸國ノ軍亦大抵此法ヲ用ケタリ英吉利ハ獨リ異ナリ今日ニ至リ猶自國ノ雇兵ヲ廢セス唯其制ヲ變改シテ往日ノ如ク多クテラスト謂フノミ

壯兵ヲ用ケルノ法ハ兵制其規模ヲ備ヘシ後ニ非サレハ往昔ニ絶テ見ケル所ナリ唯羅馬ノ時斯ノ如キ者有リト

雖ニ特ニ彪尼戰ノ時從來軍列ニ備ハルヲ許サレリシ民族ノ為ニセシニ古來壯兵ヲ用キシハ金ヲ懸ケテ聚ノ上ニ所謂自國雇兵ノ初ヲ為シタル者ノミニシテ後世一千七百八十九年自ラ振テ編入ケル者ヲ用キ其數夥シト雖ニ古今唯此歳ニ於ケルノ後一千七百九十一年及ヒ二年ノ壯兵ト称スル者ハ即此例ニ倣ヒシ者ナレト

此時ニ於テハ共和政府頻リニ之ヲ催シ且國內禍難存リニ臻リシ時ナリト雖ニ壯兵ノ數甚少ナク遂ニ民會ノ決議ヲ以テ永世全國ノ壯丁ヲ募ルノ法ヲ設ケ大ニ徵募ノ異法ニ於ケル不完ナル弊變ヲ除ケリ蓋シ金ヲ用キスシテ壯兵ヲ得ルハ募集ノ僥倖ニシテ常ニ得ヘキ者ニ非ス

故ニ尔来復々斯ノ如キ法ヲ用サレテ無シ
定規ノ編入ハ或ハ一部ヲ取リ或ハ全國ニ及ボス者有リ
其一部ヲ取ル者ハ希臘及ヒ羅馬又封建制ノ時ニ於テモ
之ヲ見ル其一部ヲ取ルノ法ハ共和政治ニ於テハ人民中
類族ヲ分テ貴族ト富者トヲ限リテ之ヲ取リ封建制ノ時
ニ於テハ列國ノ士族ヲ以テ兵ト為セリ路易第十四一時
ノ策ヲ用ヰテ捻亂法ヲ行ヒシカ路易第十五一時ニ至リ
之ヲ以テ常則ト為セシト雖モ種々變更セシ所有リテ國
ノ防禦ヲ以テ最其身ノ憂ト為ス族類ハ反テ之ヲ除キ工
人農民ノ如キ賤民ニシテ血稅ヲ課セシナリ故ニ一千七
百八十九年ノ革命亂ハ此捻亂法ノ廢絶ヲ以テ其一起因

ト為セリ此世期ノ初ニ當リ拿破侖第一ノ倒レシヨリ徵
兵薄ノ法ヲ用ケルト恣ナルヲ怒リテ猛烈ナル激論發リ
路易第十八ノ許セシ條約中ニ此法ヲ廢スルヲ以テ第
一ノ款條ト為セリ此時ヨリ以來ハ我佛郎西ノ軍及ヒ他
ノ歐羅巴諸國ノ軍ニ於テモ召集法ヲ以テ兵ヲ募レリ而
シテ此法ハ徵募ニ當ル者ト雖モ若シ代テ出ル者有レハ
其役ヲ免カル、トヲ許セリ故ニ普魯士英吉利ノ如キ編
成ノ異ナレル軍ヲ除キテハ佛郎西及ヒ其他ノ諸國ノ軍
ニ於テモ兵ハ皆貧窶ニシテ更卒ヲ出ス、トヲ得サル者カ
或ハ幼弱ノ者ニ代テ出テシ兵ノミニシテ軍中ノ才畧有
ル者ハ自ラ請テ出テシ兵ト士官トノミナル可シ故ニ軍

ハ國中ニ別社會ヲ成サントセリ佛郎西ニ於テハ殊ニ然
 リ蓋シ佛郎西一千八百五十五年ノ法ハ羅馬帝巴蘭地尼
 安ノ時行ハレシ者ヲ復々用キシ者ト謂フヘシ斯ノ如キ
 徵兵法ハ必ス其盛大ヲ期スルヲ能ハサルナリ
 全國ニ及ホス定規ノ編入トハ即之ヲ以テ全國人民ノ義
 務トスル法ニシテ舊史中某ノ時代ニ於ケル持法ナリキ
 其始メテ行レシハ一千七百九十三年ノ決議ヲ以テ條例
 ヲ立テ凡ソ全國ノ壯丁盡ク共和國防禦ノ為メニ永久徵
 募ニ應スヘシト定メシ時ニ在リ然レハ當時佛郎西大ニ
 乱レテ喋血ノ慘毒ヲ致セシハ又此新法之カ初メヲ為マ
 リト謂ハサルヲ得ス抑此法ヲ布クヲ甚ク嚴ナリシト雖

ハ其之ヲ以テ國家ノ正典ト為セシハ一千七百九十八年
 以來ノトトス是ヨリ以來徵兵薄ノ法ヲ改正シテ從來行
 レシ擅制ノ弊風ヲ一洗シ始メテ人々兵役ヲ以テ其義務
 ト為スヘキノ真理ヲ取レリ然レ更ニ後ノ權理ヲ立テシラ
 以テ忽チ法ノ品位ヲ落セリ一千八百十五年講和ノ後ハ
 諸國皆兵ヲ解キシト雖レ普魯士ハ一千八百七年以來軍
 務ヲ以テ全國ノ義務ト為スノ法ヲ取リテヨリ獨リ此法
 ヲ維持シ以テ其兵力ヲ強大トラシムルノ初ヲ為シ其大
 志ヲ掩フカ為メ一ノ口實ヲ設ケシハ已ニ上ニ見ヘシカ
 如シ斯ノ如クシテ猶未タ以テ足レリトセス更ニ名義ヲ
 唱ヘ要須ヲ起シ其人民ノ寡少ナルヲモ省ニス兵負強大

ナル軍ヲ擁シ以テ歐羅巴同盟中ニ於テ獨リ其勢威ヲ振
ハント欲セリ彼ノ詐術ヲ用キ或ハ激烈ノ所為ヲ施シ復
ト往昔ノ日耳曼帝國ヲ興シテ自ラ利セシヲ見ル可シ然
レ一千八百六十六年及ヒ一千八百七十年ノ戰爭以來諸
國大抵普魯士ノ兵カヲ加エシ所以ノ法ヲ用キテ兵ヲ募
レリ一十七百三十二年大將撒古其夢幻談ニ已ニ此事ヲ
論セリ曰ク夫レ國ハ一法ヲ設ケ其人民ノ級族ヲ論セス
其國君及ヒ社稷ノ為ニ必マ五年間公役ニ就クヘシト定
ムルヨリ善キハナシ是此法ハ善ク人道ノ自然ヲ得且人
民其國防禦ノ用ヲ為スハ固ヨリ其分ナレハ真ニ間然ス
ル所無キ者ト謂フヘシ故ニ此法ヲ以テ兵ヲ募レハ危難

ヲ逃避セサルノ義卒ヲ得ルノ源滾々トシテ涸渴セサル
可シ且其役ニ就ク者其勤務ヲ以テ榮譽ト為シ又分ト為
スハレ然ルキハ其役期ヲ終ヘシ者ハ其此法ニ從ヒ肯セ
サル者ヲ見テ賤ンテ共ニ齒スルヲ恥ルナル可シト
夫レ此徵兵法沿革ノ畧説ヲ以テ之ヲ觀レハ最終ノ法最
善ク今日社會建制ノ法ニ適合セリ然レ此法ト雖レ亦古
人ノ創定シタル募集法ニ據テ之ヲ擴張セシニ過キサル
ナリ
此徵募法ヲ用ケルハ軍ヲ分ツテ三大團ト為ス
第一 常備兵 此兵ハ編組シテ常ニ旗下ニ屯在スル
者ナリ

第二 後備軍 此兵ハ或ハ已ニ訓練ヲ經或ハ然ラズ
シテ第一ノ徵募ニ應スル者然ル此兵ハ復々常備兵ト
為ルヲ無シ

第三 國民軍 此兵亦己ニ訓練ヲ經ル者有リ或ハ然
ラズシテ各其郷里ニ在テ危急ノ際ニ當リ徒軍ス可キ
者ナリ

凡國中ノ壯丁大約年二十歳ヨリ四十歳ノ者盡ク此三團
中ニ在リ其歐羅巴諸國ニ於ケル就役約條期限ノ長短ハ
其旗下ニ在ル時日ノ長短ヨリ起リ而シテ此時日ノ長短
ハ三年ヨリ五年ノ間ニ在リ然ル此二時限中其短キ者ヲ
善シトス可キニ似タリ其故ハ摩蘭得ノ説ニ步兵騎兵ハ

論ヲ待タズ砲兵ト雖ル勤務三年ノ後ハ其業ヲ成熟ス可
シト云ヒ且陸軍ノ定額金限り有ルヲ以テ其養ヲ所ノ現
負モ亦定限無カル可ラス而シテ其常備兵中ニ在ルノ日
短キニ應シテ此中ニ編入シテ訓練ヲ受クル者又益多カ
ルヘキヲ以テナリ

平時ノ軍ハ唯常備兵ノミトス而シテ此兵ノ現負ハ人民
八十分一ヨリ百分一ノ間ニ在リ

戰時軍ヲ編成スル者左ノ如シ

第一 出征兵 此兵ハ常備兵ト其後備軍ノ一部ヲ以
テス

第二 募集兵 此兵ハ常備兵ノ後備軍中第二部ヲ以

テス

第三 護國軍 國ノ總預備軍タリ

此三團ノ兵ヲ合シタル者人民ノ十五分一ヨリ減シテ二十五分一ニ至ル

若シ本國危急存亡ノ秋ニ當テハ嘗テ軍列ニ加ハラサル者ヲモ驅テ兵ト為スコ、ニ至テハ人民ノ十二分一ヨリ十五分一ノ間ニ在ルヘシ

軍ノ募集ノ吏ハ法ヲ以テ之ヲ規制シ大抵諸國毎年之ヲ行ヒ壯丁ノ年二十ニ滿ツル者ヲ擇フ其公衆ノ利益ヲ謀リテ除役ヲ許ス者不具羸弱ノ者罪有テ刑セラレシ者ヲ除キ其他ハ盡ク軍ノ用ニ供スルトス而シテ斯ノ如ク

シテ徵募セル兵ヲ分配スルノ法未タ諸國一定セス唯之ヲ地方ニ因テ分ツノ一法有ルノミ然ル戰開及ヒ政治ノ便ヲ以テ之ヲ觀ルニ其弊害少シトセス故ニ未タ之ヲ以テ遍ネク用ウルニ至ラサルナリ

凡テ徵募ノ吏ハ吏負ト民間ノ豪族ト軍負トニ任スヘシ然ルハハ吏負ハ國ノ利害ヲ慮リ豪族ハ其族類ノ利害ヲ

省ニ軍負ハ軍ノ利便ヲ謀ル可キナリ凡テ徵募ノ吏ニ関カル表簿帳證書割記ノ類盡ク徵兵使ト稱スル士官ノ手ニ在ルヘキナリ而シテ此使ハ地方ヲ

定メテ募集ヲ為シ敢テ其任地外ニ出テス且此官ハ倉庫武庫ノ吏ヲ督理ス

二 賞典

勳獎ト壓制ト相稱フノ度ハ次ノ數言ニ基ツクヘシ曰ク
罰ヲ怖レ賞ヲ冀フノ心ハ最的實ナル思想ノ誘導ト為リ
勤務ヲ勉強セシメ心志ヲ振起セシムルモノトス
賞典ハ軍列中競進ノ心ヲ維持シ及ヒ其盡セル所ノ勳勞
ヲ賞スル為メノ者ナリ
此賞典ヲ行フニ專ラ施ス所ノ者ハ進級標警恩給及ヒ士
官ノ身分ヲ定ムルナリ

伊 進級

進級ハ軍ノ幹部ノ人負テ創設シ及ヒ之ヲ保存セシムヘ
キ者ナリ

摩蘭得曰ク進級ハ之ヲ得ル者ノ為メニハ賞典ト謂ヒ又
幸福ト謂フ可シト雖モ從テ亦負擔責任ヲ重ヌル者ニシ
テ又他日ノ奏功ヲ期スル者ト謂フヘシ夫レ士官ノ過失
及ヒ其撰舉不精ナルノ報ハ敗衄ト兵卒ノ鮮血トニナル
可シ慎マサル可ケンヤ故ニ下士ヲ選舉シ及ヒ之ヲ昇進
セシムルハ政府ノ殊ニ注意セサル可ラサル重事ナリ下
士ハ直ニ兵卒ノ上ニ立テテ之ヲ指揮ヲ為シ且終始之ト
共ニ生活スル故ニ其軍陣ノ勇ニ於ケル上ニ順テ貞操ニ
於ケル其事ヲ執ルノ嚴格ナル操行ノ善良ナル職ヲ奉ス
ルノ勤勉ナル悉ク兵卒ノ標準ト為ル可キナリ償伯拉又
曰ク善良ナル幹部ハ武教善ク至リテ隊ノ風習ヲ正フシ

兵吏ニ熟練シ軍紀ニ習ヒ以テ武人ノ器ヲ具フヘキナリ
夫レ幹部斯ノ如クナレハ其武器ノ利鈍ヲ論セヌ必ス其
任ヲ辱ムルヲ無ル可シ蓋シ進級ノ法ヲシテ完全ナラシ
メンニハ特ニ兵務ノ事ヲ論スルノミニニシテ足レリトマ
ス亦必ス政治ノ主旨ヲ照合セサル可ラス其故ハ兵ハ國
ノ政体ト社會ノ法則ニ從テ斟酌スヘキ者ナレハナリト
斯ノ如クナルヲ以テ進級ノ法ハ軍ノ品位ヲ上下スルノ
大ナル募集ノ法ニ異ナラス是諸國皆士官下士ヲ教ユル
學校ヲ設クル所以ナリ凡ソ此學校ニ於テハ士官下士共
ニ詳密ニシテ一齊ナル教程ヲ學フトス是他日散シテ
軍隊ニ入ルルハ其職吏ヲ執掌シテ餘暇少ナキヲ以テ教

習スルヲ能ハサル故ナリ又政府并ニ國民ニ於テモ幹部
善ク其職吏ヲ熟諳スルハ最貴重スル所ニシテ若シ幹部
寡少ナルカ或ハ不良ナルニ方テハ必ス國ノ不幸ヲ招ク
ノ恐アリ若シ其教育至ラサレハ勢ヒ其數ヲ増サ、ルヲ
得ス然ルキハ國用忽チ缺乏ヲ告クルニ至ルヘシ之ニ因
テ之ヲ觀レハ兵制ノ緊要トスル所ノ者ハ進級ノ法ヨリ
大ナルハ無シ

階級相次テ武官ノ位班ヲ定ム而シテ之ヲ細別シテ四ト
為ス曰ク下士士官上長官將官是ナリ

第一 下士ハ伍長軍曹ナリ而シテ伍長ハ編成ノ初級
ナル一群ヲ指揮シ軍曹ハ此群ノ二個或ハ四個ノ長々

第二 士官ハ大中小尉ナリ而シテ中尉ハ軍曹ノ指揮スル群二個或ハ四個ヲ指揮シ大尉ハ給養編成訓練軍紀ノ單位ニシテ時トシテハ戰闘ノ單位ト為ス隊ヲ指揮ス即公班尼越加多龍拔得利ノ長ナリ

第三 上長官ハ剛曼但ゴマンダン及々哥羅納コロナナリ剛曼但ハ一拔隊龍或ハ越加多龍拔得利二隊若クハ數隊ノ長ナリ剛曼但ハ拔隊龍越加多龍拔得利而シテ哥羅納ハ聯隊ノ長ナリ

第四 將官ハ大部隊ノ長ナリ其称号ハ諸國一ナラスト雖モ其任スル所ノ指揮ニ應スル称号ヲ得ルモノトナリ

兵隊ヲ指揮スル者ヲ除キ更ニ給養其他ノ俗務ニ任スル屬負有リテ亦皆此位階中ニ列ス然レ此職務ノ莫ハ本篇説ク所ノ範圍ノ外ニ出テ學校ノ教程給養學ノ部ト為スヲ以テ其説子細ノ事ニ及ハス而シテ此屬負ノ任スル職務ノ外ニ於テハ其同位階中ニ於ケル等級ノ下ナリ摩蘭得曰ク新官ノ者ハ舊官ノ如ク善ク莫ク辨スルヲ能ハサルヲ以テ凡テ位階ハ二種ノ等級ヲ立ツヘシ而シテ此二種ノ間ニ於テ俸金ト記章ノ差等ヲ立ツ可キナリト諸國ノ軍多ク此説ヲ採用シテ其ノ位階ニ施シ殊ニ久シク奉職セシ大尉ノ為ニセリ是軍ノ編成ニ於テ殊ニ重スル所

上ニ舉ケタル諸位階ハ皆其初ヲ古ニ取レリ然レ往昔ハ
 位階ノ順序ニ於テ方今立ツル所ノ者ト位置ヲ同フセサ
 ル者アリ假令ハ方今下士及ヒ屬長ノ位階ト為ス者往昔
 ハ之ヲ更ニ貴キ士官ノ位階ト為セシカ如シ然レ後世軍
 ノ數漸ク増加セシヲ以テ更ニ新制ノ位階ヲ設ケ以テ其
 管轄ノ大ナルニ應セシメシナリ
 進級ハ權理^ド拔擢^シ新舊^ノ衆議^ヲ當官ノ法ヲ用^フシカ方今モ猶
 然リ
 權理ノ進級ハ其國ノ政体ヨリ起ル者ナリ古昔封建制ノ
 時社會中權アル者ハ自ラ兵卒ノ司令ト為リシナリ某ノ

國ニ於テハ此法嚴ニシテ將家ノ門族ヲ成スニ至レリ方
 今ニ至テモ立君政治ノ國ニ於テハ自然權理ヲ以テ官ヲ
 得ルノ風ヲ免ル、^一能ハスシテ國君ノ血族ハ連ニ軍ノ
 高官ニ登ル^ト常ナリ
 衆議ノ進級ハ羅馬ニ於テ其例ヲ見ル後世一千七百八十
 九年ノ共和政治ノ時數年間此法ヲ行ヒ又一千八百七十
 年ノ共和政治ニ至リ復ヒ間種兵^{兵部ト國民ノ間ニ}在ル一種ノ兵ナリニ於
 テ此法ヲ用^ハタリ然レ其法二有リ一ハ其轉進スヘキ兵
 ノ頭長相會シ或ハ同等ノ者相會シテ之ヲ決シ一ハ下級
 ノ者相會シテ決セリ其第一ノ法ハ弊害甚ク少ク今日ニ
 至リテモ歐羅巴諸國編成法備リタル軍ニ於テ之ヲ用^ク

唯大ニ衰エシト謂フノミ第二ノ法ハ其弊タル甚ク大ナリ故ニ償伯拉曰ク此昇級法ハ軍紀ヲ殘ク而シテ乱世ニ方テハ其弊勝テ謂フ可ラス或ハ謀反ノ端ヲ開クヲ有ルヘシト

金ヲ以テ官ヲ買フトハ路易第十四ノ時復ニ行ハレ此王之ヲ以テ國典ト為セリ往日嚮官ノ法佛郎西ニ行ハル、ト凡ソ百年一千七百七十年之ヲ廢マシト雖氏其全ク止ミシハ一千七百八十九年以來ノトトス英吉利ハ佛郎西ニ此法ヲ行サシヲ聞テ之ニ倣ヒシカ二年ニシテ之ヲ廢セリ

拔擢ノ進級法ハ古今ノ通法ニシテ拿破侖第一嘗テ曰ク

欲ノ人ニ於ケルマ尚ホ大氣ノ萬物ニ於ケルカ如シ人心ニシテ而シテ情欲無ク物体ニシテ而シテ大氣無ケレハ則天下後ヲ動クヲ無シト是真ニ進級法ノ基本ト為ス可シ夫レ拔擢ノ進級法ハ其調査ノ法立テハ勲勞ノ賞ナリ然ラサレハ愛シテ恩惠ト為ル可シ一千七百八十九年ノ革命ニ頒布シタル新令ハ大ニ此弊害ヲ除キ其撰擧大ニ公正ナリト雖氏猶未タ甚ク審明ナラス蓋シ此時ニ至ルマテ其撰擧公正ナラサリシナリ然氏拔擢ノ進級ハ隊中競進ノ心ヲ鼓舞シ勲勞有ル者ヲシテ速ニ高位ニ登ラシムヘキナリ蓋シ士官各其出處ヲ異ニスル軍ニ於テハ此法ヲ以テ常ト為スヘシト雖氏亦恐クハ偏頗ノ初ヲ開カ

サレテ保テ難シ

停年ヲ以テ取ル進級ハ常ニ行ハレシ法ニ非スシテ古昔
某ノ官職ニ於テ之ヲ用ヰシト有リ路易第十四初テ之ヲ
以テ國ノ正典ト為セリ此時ヨリ以來諸國ノ軍往々此法
ヲ取レリ我佛郎西共和政治ノ時無替ノ濫用ヲ為シ無賴
無智ノ兵卒ヲシテ高官ニ登ラシメタリ是ヨリ以來某ノ
軍ニ於テハ拔擢ノ法ト相混シテ之ヲ用ヰ其士官ノ出處
齊キ軍ニ於テハ進級ノ權理ハ特ニ停年ノミニ在リトセ
リ

以上説ク所ノ諸法中現今存スル者ハ拔擢法ト停年法ト
ナリ下士ノ諸位階ハ皆拔擢ヲ以テ得ヘキ者ニシテ其之
ヲ上申スル權ハ多ク大尉ニ在リ而シテ之ヲ命スル權ハ
大佐ニ在リ又士官ノ位階ハ其拔擢ニ由ルト或ハ停年ヲ
雜用スルトヲ論セス陸軍卿ノ上請ヲ以テ國ノ主長之ヲ
命スルトトス

呂 標譽

標譽ハ勲勞ヲ賞スル為メノ者ニシテ之ヲ以テ有功ノ者
ヲシテ其同國人ニ對シ面目ヲ施サシムル所以ノ者ナリ
拿破侖第一曰ク富ハ軍人及ヒ審官ニ備ハリタル者ニ非
ス而シテ人ノ尊重畏敬ヲ受クルハ其當サニ得ヘキ所ノ
者ナリ蓋シ人ノ崇敬ヲ受クルハ則名譽ノ存スル所ニシ
テ是即真ノ國カト謂フ可キ者ナリト又曰ク勲章ヲ帶ヘ

ル美觀ハ金鎖ノ比ニ非スト摩蘭得曰ク勳章ハ今日政府
人ヲ鼓舞シテ其防衛スル國ノ為ノニ職務ヲ勉勵シ國威
ヲ張ルノ心ヲ作真スル所以ノ者ニ於テ最効驗有ル者ノ
一タリ

舊史ノ傳フル所ヲ觀ルニ皆此説ノ如クニシテ古今萬國
皆標譽ノ典無キ者無シ希臘ニ布告功蹟ヲ布告立像記念
塔冠ノ類有リ羅馬ニ於テモ之ニ齊シキ者有リテ更ニ各
種ノ記章、凱陣式及ク凱陣ノ弓門有リ封建制ノ時ニ勳級
士ノ拍車エトロヲラゾン、アルモリ共ニ徽有リ中古ヨリ今日
ニ至リ猶勳級士ノ勳章、榮號、勳勞ヲ表スル武器、旌表、感狀
有リ

國ノ風習ト政體トヲ論セズ標譽ノ典ハ古今萬國缺ク可
ラサル者ト為シ唯其外狀ニ異同有ルノミニシテ其取ル
所ノ實ニ至テハ皆異ナルヲ無シ立君政治ノ國ニ於テハ
常ニ此標章ヲ顯著明ナラシメ共和政治ニ在テハ或ハ
之ヲ廢セントスルノ説アリ然レ我佛郎西ニ於テハ決シ
テ之ヲ廢ス可ラス蓋シ我國ノ制ニ於テハ凡ソ政府ノ勳
勞ヲ稱譽スル軍人ハ必ス明瞭ナル記章ヲ帶フルトシ
人民亦皆此記章ヲ見テ國家ニ勳勞アリシ徵證ト為シテ
之ヲ尊フ可シ

波 恩給

恩給ハ金ヲ以テ功ヲ賞スル一法ナリ摩蘭得曰ク軍人ハ

須ラク法ヲ立テ、之ヲ保護シ及ヒ約ヲ立テ軍人ハ政府ニ奉仕シ而シテ政府ハ其身ヲ保育シ及ヒ其親族ヲ撫恤スルノ約ヲ固フシ以テ軍人ヲシテ其將來ノ運ト子孫ノ運トヲ思ハヌ其心思ト才幹トヲ盡ク職事ニ竭スヲ得セシムヘシト

希臘羅馬ノ軍ハ其建設ノ法ニ思給ノ規則ヲ見ス歐羅巴諸國建國ノ時ヨリ貴族ノ功有ルニ應シテ物ヲ賜ヒ土地ヲ藉シ思給ヲ賜フトス彼ノ阿伯羅阿伯羅兵卒ノ勲勞ヲ賞シテ養育院ニ於テ養者摩彼往昔半給ヲ與ヘ營ノ制有リシハ皆此類ナリ又後世ノ京藩公曼第利聖路易查理鐵西拉池安內阿底斗安拔利多利多共ニ病ノ如キ病院有テ羸兵ヲ養ヘリト雖氏未タ之

ヲ以テ兵士ノ權理ト為サヌ故ニ思給ヲ賜フモ唯特旨ニ出ルノミ若シ之ヲ賜ハテサルキハ或ハ食ヲ乞フニ至ル者有リキ我革命前ヲ距ルテ大畧百年其事態斯ノ如ク不完ナルヲ以テ之ヲ改正センテ務メタリ是ヨリ以來思給ノ典ヲ立テ軍人各適當ノ思給ヲ賜フテ偏重ノ私無キトトナリタリ方今ニ至リテハ其國ノ為ニ長ク奉仕シ及ヒ勲勞有ル者ハ必ス思給ヲ受クルノ權理ヲ有テ其昔日ノ勞ニ因テ其身ヲ安スルヲ得若シ勤務中病衰シ或ハ職事ノ為メニ其身不具ト為リタル者モ亦同シク此思賜有ルトトス若シ其死スルニ方テハ其寡婦遺孤ハ生計ニ窮スルノ慘ニ無カラシメタリ

仁 將校ノ身分

佛郎西ノ制度ニ於テ將校ノ身分ハ其位階ノ官名ニ應ジテ備リタルモノトス
斯ノ如クナルヲ以テ位階ハ將校ノ固ヨリ有スル所ニシテ其身分ノ確實不動ナルハ審官ト異ナルヲ無シ故ニ其身死亡スルカ老衰スルカ辭職スルカ或ハ罪有テ黜ケラレニ非サレハ其身分ヲ失フヲ無キハ亦審官ト齊シカルヘシ是此二官ハ其身分ヲ異ニシ其趣ヲ殊ニシテ而シテ其制ヲ同クスル者ナリ蓋シ身分ノ不動ナルヲ以テ審官ハ其考案ニ從テ吏ヲ裁決スルノ權ヲ得將校ハ之ヲ以テ各其長官ヲ戴キテ不拔ノ權ヲ持シ而シテ二者共ニ其

官ヲ保有シ恩給ヲ要求スル如キ各其官ニ備ハリタル權利ヲ有ツテ確乎トシテ動カサルヘシ
夫レ斯ノ如ク保護ノ法ヲ立ツルハ我國ノ如ク屢政体ヲ變スル國ニ於テ肝要トスル所ナレ氏絶テ其政体ヲ變セサル國ニ於テハ用ウル所無キハ言ハスシテ明カナリ
下士ハ諸國ノ軍皆其身分ヲ立ツルヲ無シ是蓋シ一ノ缺典ニシテ之ヲ補フモ難カラス且反テ利益アルカ如シ其故ハ斯ノ如クスレハ衆人ノ目ニ下士ノ位置ヲシテ大ニ高カラシム可キナリコトヲ以テ其缺漏ヲ補ハンカ為メ下士ノ長ク職ニ在ル者及ビ殊功有リシ者ハ之ヲ俗吏ノ賤官ニ移ラシムルトス是五十年前摩蘭得ノ言ニ從フ

ナリ其言ニ曰ク文吏ノ属官ハ兵卒下士ノ老官ヲ轉任セ
シメ以テ其勤勞ヲ賞スルノ地ト為スヘシト故ニ政府ハ
軍中ノ規則及ヒ軍紀ニ堪ヘヌシテ而シテ名譽ト職掌ニ
志篤キ兵士ニ此小吏ノ職務ヲ任スルヲ善シトスヘキ
ハ明カナリ

保 鎮壓ノ法

陸軍ノ權ヲ以テ行フ鎮壓ノ法ハ軍紀ヲ犯セル者ノ罰ト
法ニ觸ル、者ノ罰トナリ故ニ鎮壓ノ吏ハ相異ナルニト
為リ一ハ軍紀ノ權ニ據リ一ハ法律ノ權ニ據ルヘシ
我佛郎西革命前ニ於テハ軍紀及ヒ軍事審判ノ區別ヲ見
ルト難シ往昔封建制ノ時及ヒ近古ノ諸國ニ於テハ軍紀

ノ規則ト審判ノ法ト其區別ノ混淆極マレリ當時刑罰及
ヒ懲罰共ニ嚴酷ナル内刑ト廢黜トヲ以テ專ラトシ而シテ
其罰其犯セシ罪ニ相當ラザリシト詳ニ大将撤古ノ夢幻
談中ニ見ヘタリ一千七百八十九年ノ革命ニ當リ時論ニ
從テ民會ヲ起シ其第一會ニ司法省ノ主首ニ基ツキ陸軍
裁判所ヲ設ケシカ軍紀ノ制及ヒ其用法條理ヲ失ヒ遂ニ
陪審ノ制ヲ用カ加之ナラス司法省ノ審官ヲ用ウルニ至
レリ然レ久シカラスシテ此弊ヲ一洗シ此事ニ於テ我ヨ
リ先進タリシ外國ニ譲ラサルニ至レリ而シテ此他兵制
ノ事ハ彼反テ我ヲ師トセシナリ
方今ニ至テハ開化諸國ノ軍皆軍紀ノ法則ト審判ノ律ヲ

設ケタリ

一 軍紀

軍紀ハ懲罰ヲ以テ註誤ヲ改ムル所以ノ者ナリ蓋シ軍紀ハ兵制ニ於テ缺ク可ラサル者ニシテ外面ヨリ改心ヲ催ス者ナリ故ニ軍紀ハ亦社會ノ法則ヲ助クルト大ナリ拿破侖第一曰ク軍紀ノ法則嚴ナレハ軍ヲシテ其敗亡喋血ヲ救ヒ殊ニ耻辱ヲ免レシムヘキナリ軍人ハ宜シク耻辱ヲ惡ムト死ヨリモ甚タシカラシムヘシ故ニ國其兵ヲ失フト雖氏之ヲ得ルハ甚タ易ク一タト名譽ヲ損スレハ復タ追フ可ラスト

軍紀ハ法ニ由テ起リ而シテ陸軍ノ制ハ軍紀ヲ以テ主ト

為ス故ニ軍紀ハ二者ノ間ニ在リテ之ヲ相連繫セシムル者ナリ凡テ其國ノ政体ニ拘ハラス軍紀ハ苟モ首長タル者ハ其部下ノ法則ト為ルノ主旨ニ據リ以テ衆力ヲ盡カシムヘキナリ又下ノ者ヲシテ上位ノ者ニ服従スルトニ習慣セシメ上下尊卑ノ分ヲ定メ下ニ兵卒ヨリ上ニ陸軍卿及ヒ國ノ頭領ニ至ルマテ次第ニ權威増加スルノ基本ヲ立ツヘキナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ軍紀ハ兵力ノ由テ基スル所ニシテ若シ之ヲ缺クハ建軍ノ一復タ論スヘカラサルナリ

人ヲ罰スルノ權ハ武官ノ特權ナリト雖氏亦法律有テ之ヲ抑裁シ毫モ濫用ニ陷ルト勿レ諸國ノ軍人ヲ罰スルニ

方テハ大低大尉ト大佐專ラ事ヲ決ス蓋シ此二官ハ各其部下ニ一類族ヲ率セ故ニ諸國之ヲ以テ審官トナシ一ハ以テ公班尼ヲ保護シ一ハ以テ聯隊ヲ保護セシムルヲ以テ其法ヲ得リトス

位階ノ次序ニ從テ其權ヲ行レシムルハ統御ノ一難事タルヲ論ヲ待タサルヤリ凡テ人ヲ治ムルニハ其不順ノ所為ヲ懲ラスタ待タス自ラ改悟セシムルヲ知ラサル可ラ是政府ノ幹部ヲ擇フニ常ニ辛勞スル所以ノ一ナリ夫レ之ヲ制御セシムル其處置萎弱ニ流ル可ラヌ又頑固ニ陷ル可ラヌ怒レル者ハ之ヲ懲ラシ其過ノ增長スヘキト減衰スヘキトノ狀ヲ察シ其之ヲ罰スル機會ヲ失ハス

レテ善ク輕重ノ適度ヲ得其罰ヲ命スルヲ沈着シテ敢テ下ヲ凌虐スルヲ無ク而シテ此數事ヲ商量スルヲ迅速ニシテ粗暴ナラヌ以テ法ヲ犯ス者ハ其罰踵ヲ旋サスシテ至ラシムルハ功ヲ積ニ事ニ熟スルノ後ニ非サレハ初ノヨリ之ヲ能スル者蓋シ少シ

方今ハ諸國ノ軍特ニ人ヲ罰スルノ權ヲ限制スルノミニニ非ス其罰則ニ亦精密ニ定マレリ然レ罰則ハ往昔諸國ノ軍ニ用キシ者各大ヒニ其法ヲ異ニシ現今ニ至リテモ亦諸國其法ヲ同フセス某國ノ軍ニ於テハ往昔專ラ軍紀ノ兵ヲ鎮壓スルノ具ト為セシ肉刑ヲ猶存シテ用井又某國ノ軍ニ於テハ時日ノ長短ヲ定メテ禁錮シ以テ之ニ代ヘ

タリ蓋シ斯ノ如ク相異ナル所以ハ民性ノ異同ニ在リト
雖モ多クハ徵募法ノ異ナルヨリ起ル者トス

回史ニ概見スル者ヲ以テ觀ルニ軍紀ナル者ハ万国悉ク
無カル可ラサル者ト為セリ故ニ摩蘭得曰ク軍紀ハ軍ノ
精神ナリ若シ軍ノ要点タル軍紀無レハ所謂軍ナル者ノ
内ニ集リタル兵ハ特ニ野獸ノ群ヲ為セルニ異ナラズト

ニ 審判

審判ハ輕罪及ヒ重罪ヲ刑シテ改心セシムル所以ナリ
軍ハ全ク社會ノ法則ニ倣フト雖モ更ニ規則ヲ設ケ別ニ
風俗ヲ為セル一社會ナリ故ニ之ヲ保存スル所以ノ者ヲ
確實ナラシムルヲ以テ缺ク可ラサルト為ス而シテ陸

軍裁判ハ之ヲ以テ目的ト為シ善ク軍紀ノ用ヲ完備セシ
ムル者ナリ馬爾門曰ク審判ノ事ハ軍紀ヲ掌リテ常ニ此
事ニ心ヲ用テ善ク其職掌ヲ盡シテ最事ニ熟セル者ニ託
スヘキナリト

斯ノ如シト雖モ輕罪及ヒ重罪ニ二種有リテ軍律ニ觸ル
、者ト常律ニ觸ル、者トノ別有リ而シテ拿破侖第一ノ
審判ハ速ニシテ且嚴ナルヲ要スト云ヒシ言ニ從ヒ其軍
律ニ觸ル、者ハ全ク軍ノ特權ニ皈セシト雖モ其常律ニ
觸ル、者ハ此世期ノ初ヨリ屢議論業テ之ヲ兵權ニ皈ス
可ラストセリ蓋シ此議論ハ一大要旨ニ關スルト雖モ遂
ニ其結果ヲ見ス方今ハ諸國ノ軍皆軍事裁判所ヲ置キテ

裁決ヲ為セリ而シテ其制度ヲ觀レハ職掌ノ推義及ヒ其
法則ニ於テ諸國各少シク異同有リ

方今ハ諸國大抵重罪ヲ犯セシ者ニ非サレハ肉刑ヲ加フ
ルヲ無シ兵部ニ用ウル罰ハ平民ノ罪ヲ懲ラスノ法ト大
ニ相類ス是其身ノ自由ヲ禁銅スルヲ專ラトスルヲ以テ
ナリ然レ軍ニ在テハ重罪クリムヲ以テ刑ノ耻辱ヲ受クヘキ罪
人ハ盡ク之ヲ局外ニ出シ且純粹ノ單律ニ觸ル、輕罪テリヲ
刑スル為メ自ラ特別ノ刑法有リ

第二章 給養ノ制

フランス、プロシヤ、アメリカ、スウエーデン、

給養ノ制トハ諸軍用物品ノ貯蓄保存支給ヲ確實ナラシ
ムル為メ用ウル法則ヲ云フ又軍費ヲ辨シ及ヒ戦争ヲ為

スニ須要ナル金ヲ配當スル約束ヲ定ム

凡テ軍ノ給養ニ関スルハ甚重大ニシテ人民公私ノ幸
福戦争ノ成敗及ヒ國ノ盛衰ノ由テ関カル所ナリ摩蘭得
曰ク給養ノ根則ヲ立テ之ヲ陸軍省ノ制度ト為シ陸軍卿
屢交替スルカ為メ及ヒ此要職ニ任スル人ノ意高偏弊ヲ
以テ動搖セサラシムヘシ而シテ斯ノ如クサラシメニ
ハ法度ト建立法ニ根據シ布令ノ如キ随意ニ変換スヘキ
者ニ基ツクテ勿レト抑此要旨ノ實ニ行レシハ摩蘭得ノ
此言有リシ以表ニシテ方今ハ歐羅巴諸軍ノ給養法大抵
法度ニ據テサル者無シ
軍ノ須需ヲ盡ク飽カシムル為メ給養ノ定規ニ據ルト雖

其用ウル所ノ方法ニ至テハ變化極メテ甚シキハ言ハ
スシテ知ルヘシ是蓋シ其之ヲ備フル物品ノ異ナルト土
地ノ貧富ト民政ノ採レル法ニ由リ殊ニ軍ノ形勢ヲ以テ
變化スヘキアリ

夫レ麵包ヲ備フルト騎馬ノ兵ニ馬ヲ備フルト佛郎西ノ
為メニスルト西班牙ノ為メニスルト立君政治國ノ為メ
ニスルト共和政治國ノ為メニスルト昇平ノ兵ノ為メニ
スルト國界ニ出テ、戰フ兵ノ為メニスルト各其法ヲ異
ニスルハ亦更ニ辨解ヲ要セサルハシ故ニ^{ビゴルージョ}五爐臣ノ言
ノ如ク給養ハ軍衛中ノ最重スル所ナリ古ヨリ名將ノ給
養ヲ為ス其法秀絶ナラサルハナシ是蓋シ給養其法ヲ得

ルハ軍紀ノ堅確ナル初ニシテ而シテ其方ヲ失スルハ則
其兵ヲシテ賊ヲ為サシムル所以ナルヲ知レハナリ拿破
侖第一曰ク凡ソ軍紀ヲ壞乱シ軍ヲ亡失スル所以ノ者搶
掠ヨリ甚キハ無シト則是ノ謂ナリ

軍ハ譬ヘハ絶テ利潤ヲ生セサル資金ノ如シ然レモ却テ
能ク他ノ資金ヲシテ利潤ヲ得セシムル者トス其年額金
ヲ議スルキ民會ノ許諾スル額金ノ多寡ニ應シテ其保育
ノ為メニスル萬事ヲ辨ス而シテ治平ノ日旗下ニ在ル兵
卒ニ費ス所年々一人ニ八百五十弗蘭^{フラン}ヨリ一千二百弗蘭
トス有事ノ時ニ於テスル費耗ハ其中等ノ算測ヲ立ル
能ハス

此定額金ノ費耗ヲ正フスルヲハ陸軍會計官ト為レル特
別ノ有司ニ任スルヲ通例トス而シテ更ニ諸有司ニ其要
需ノ理由ニ應シ及ヒ法則ヲ照シテ若干ノ金額ヲ分附ス
而シテ後其檢閲ニ供フル會計簿ヲ檢シテ其費用果シテ
精密ニシテ濫費無キヲ證ス可シ馬爾門曰ク給養ヲシテ
善ク至ラシムルノ本ハ費耗ノ法嚴正ナルニ在リト
其事ニ施スニ方テハ或ハ之ヲ士官ニ任スル者有リ或ハ
之ヲ會計ノ屬吏ニ任スル者有リテ凡テ其事態ニ因テ一
定セサルハ後ニ詳論スルカ如シ
給養事務ハ分ツテ三大部ト為ス曰ク兵ノ保育、徵馬、軍用
器具ノ製造是ナリ

一 兵ノ保育

馬爾門曰ク凡テ兵衆相集レハ從テ要需ヲ起スヘシ而シ
テ事順整ヒ節儉至リ事ヲ執ル精練ニシテ以テ此要需ヲ
飽足セシムル伎倆ハ則給養學ノ在ル所ナリ經驗ニ據ル
ニ凡ソ兵ハ俸金給與ノ法善ク整ヒ糧食飽足シ衣服良好
ニシテ善ク疲勞ヲ休息スルヲ得病者創者ハ其撫恤能
ク至ルヲ知ルハ必ス憤戰死闘スル者ト見ヘタリ而シ
テ其保育ノ為メニ主トシテ施スヘキ事務ハ給俸、給食、給
衣、宿營、衛生法ナリ
諸國ノ軍此事務ヲ取ラシムルニ別ニ屬吏ヲ用キ此吏官
金ヲ用キテ軍ノ須要ヲ飽カシム然レ人民ノ公益ヲ害ス

ルヲ慮リ一有司ヲシテ此屬吏ノ為ス所ヲ監督セシム然
リ而シテ給養學ノ度ハ特ニコ、ニ止ラスシテ更ニ大難
事ト為ス所有リ實ニ給養ハ軍ヲシテ常ニ戰爭ヲ為スノ
準備ヲ缺カサラシムヘキ者ニシテ凡百般ノ事務其目的
ト為ス所ハ一ニ爰ニ在リ夫レ治平無事ノ日國內ニ於テ
其準備至レリト為ス者一旦出テ戰鬥ヲ為スニ方テハ一
役中不足ヲ生スルト必カラス故ニ國家閑暇ノ日ニ及テ
他日戰爭ニ方テ要スル万事ヲ完備セシムルト一大國計
ト謂フ可シ其麵包司、縫工、省病卒ノ如キ不戰員ヲシテ此
屬吏ノ下ニ隸セシムルモ亦此意ナリ而シテ軍用諸物ノ
運輸ニ備フル諸運車ヲ馭スル輜重兵モ亦之ニ屬隸セシ

ムヘキナリ

治平ノ日諸勤勞ノ度ヲ足ラシムル為メニ取ル法ハ歐羅
巴諸國大ニ相同シ然レ戰時ニ於テスル者ハ大ニ相往庭
ス某國ニ於テハ到ル所ノ地ニ因テ兵ヲ保育シ其休憩ハ
露營ト舍營ヲ為スノミ又某國ニ於テハ軍皆糧食及ヒ宿
營ニ用ウル天幕ヲ齎ラス然レ若シ第一ノ法ヲ用ウル者
軍紀解弛スルハ槍掠ヲ恣ニシ忽テ其地ノ產資涸渴シ
遂ニ其徵發ノ急ナルカ為メニ人民ノ不良ヲ醸スニ至ル
可シ又第二ノ法ヲ用キ兵若シ堅強ナラサルハ忽チ強
兵及ヒ健馬ニ乏キニ至ルヘシ且然ルキハ其齎ス所ノ料
材偶其軍ノ障礙ト為ルノ大不便ヲ起スヘシ

以上論スル所ヲ以テ觀レハ陣中ノ給養法善ク至リ百般ノ須需ニ應答シテ更ニ辨セシムル一甚々易カラズ蓋シ給養ハ兵ノ保存確實ニ兵士ノ需ムル所ノ物品非常ニ多カラサレハ時ニ應シテ之ヲ得而シテ車輛ノ如キ者其數極少ナレハ其目的ヲ達セリト謂フヘシ

夫レ軍ヲ保育スルノ術ハ兵學中極メテ貴重ナル一科タルハ此畧說ヲ以テ知ルヘシ蓋シ給養ハ戰爭ノ全勢ニ大盛衰ヲ致ス者ナルヲ以テ其方法ヲ精密ニ探究シ其施行ノ確實ナルヲ欲スルナリ往日本ノ時代ニ於テ宰相路波（路波第十四ノ宰相）ノ時殊ニ其後ノ宰相ノ時ニ方テ其給養ノ便利ヲ思フヨリシテ戰爭ノ風ヲ變シテ專ラ攻城ヲ以テ

利ト為セリ是蓋シ攻城ハ軍用ノ諸物衣食ヲ支給スルニ進退轉遷スル軍ニ給スルヨリ易キヲ以テナリ已ニ上ニ見ヘシ如ク拿破侖第一陸軍省ヲ分テ二部ト為セシト雖氏拿破侖ハ國君ノ權ト大元帥ノ權トヲ兼ホテ戰爭ノ總督ト為リ且其人ト為リ將相ノ才ヲ兼備セシヲ以テ之ヲ分ツト雖氏絶テ弊害ヲ見サリシナリ是ヨリ以後ハ陸軍卿ハ平時ニ於テ軍ノ長ト為リ戰時ハ元帥軍ノ指揮ヲ為セリ故ニ元帥ハ軍ノ司令官ニシテ卿ハ給養ノ長官タリ元帥ノ總參謀ノ長ハ元帥ノ号令ヲ諸隊ニ傳ヘ卿ノ會計監督ハ兵隊元帥ノ號令ヲ奉スル為メニ用ウル諸品ノ準備ヲ確實ナラシムコトヲ以テ士官ハ凡テ其在職中其初

ヨリ上位ノ職ニ堪ユルノ伎倆ヲ具ヘ而シテ善ク其職事
ト其職掌ノ權義ヲ詳ニシ其隊ニ缺乏ノ患無カラシムル
ニ肝要ナル給養法ヲ研究スヘシ然レ給養ノ事ハ學校ニ
於テ別ニ教程有ルヲ以テ以上示ス所ノ説ノミニシテ深
ク論セス唯生徒ニ戒ムルニ給養ノ事ト雖レ之ヲ賤ム
ナク勉強シテ學ハサル可ラスト云フヲ以テスルノミ若
シ生徒此科ヲ忽ニスル内ハ兵卒ノ士官ニ向テ要需スル
權理ヲ知ラスシテ之ヲ禁スルヲ能ハス又之ヲ飽カシム
ルヲ能ハス假令其人ヲシテ天資睿敏ナラレムモ遂ニ
其部下ノ心ヲ失ヒ其為ス所功無ク部下ノ怠慢甚シクシ
テ困苦凶ス可ラサルニ至ラン

二 徵馬

徵馬ノ制ハ騎兵砲兵及ヒ軍ノ各輜重ノ為メニ細馬挽馬
馱騾ヲ備フル為メノ者ナリ
歐羅巴諸州徵馬ノ法ハ其國ノ馬ヲ産スル景況ヲ以テ各
同シカラス蓋シ山國ハ之ヲ産スルト多シフシテ外國ノ
産ヲ仰カサルヲ得ス而シテ平坦ノ國ハ之ヲ産スルト屢
國軍所用ノ數ヲ超ヘタリ
第十八世期ノ末ニ至ルマテ佛郎西騎兵ノ徵馬ハ一尚社
ヨリ之ヲ購求セリ緒瓦索諸兵種ノ大尉ノ兵卒徵募ノ權ヲ
奪ヒシ時此徵馬ノ弊法ヲ改メタリ是ヨリ以來我佛郎西
ノ騎兵ハ三十年前大將撒古ノ夢幻談ニ見ユシ如ク其操

法一進歩ヲ為セリ是軍ノ編成及ヒ兵制ノ軍ノ品位トカ
能ニ變化ヲ致ス大ナルノ一證ナリ是ヨリ一千七百八
十九年ニ至ルマテ聯隊自ラ其馬ヲ購求スルトシ此年
ヨリ一千八百十八年ニ至ルマテ此法ニ雜用スルニ通常
ノ購買法ト徵發法トヲ以テセシカ此年ニ至リ始テ徵馬
厩ヲ置キタリ歐羅巴洲中某ノ國ニ於テハ此時既ニ此新
法ヲ用キ又或ハ我ニ次テ之ヲ模擬セシ國有リ方今ニ至
リテハ遍ホク徵馬厩ヲ置クト為リタリ
諸國大抵官有ノ牧場有テ其軍徵馬ノ用ニ供セリ然レ此
牧場ヨリ生スル馬ハ善良ナル者少シ故ニ又更ニ他ニ求
メサルヲ得スシテ相異ナルニ法ヲ用ユ則一ハ購買法ニ

シテ一ハ徵發法ナリ

購買法ハ政府ノ經費ヲ大ナラシムルノ害アリ戰爭ノ時
ニ方テハ殊ニ然リ然レ細馬ノ如キ特異ノ調習ヲ要スル
者ハ買辦ニ非サレハ他ニ之ヲ得ルノ道無シ某ノ國ニ於
テハ切弱ノ馬ヲ買ヒ二年間徵馬厩ニ置キテ之ヲ調習シ
然ル後ニ兵隊ニ授ケ斯ノ如クスレハ馬ノ價大略七百五
十弗蘭ニ過キスシテ中算ニ據ルニ九年間用ウヘシ又某
ノ國ニ於テハ其用ニ堪ユヘキ年齡ノ者ヲ買ヒ暫時徵馬
厩ニ置キテ直ニ兵隊ニ授ケ斯ノ如クスレハ馬ノ價凡九
百弗蘭ニシテ其之ヲ用ウルノ年數中等ニテ八年トス然
レハ此ニ法中初メノ法ヲ善シトス可シ

徵發法ハ軍其要須スル馬ヲ徵シテ之ヲ用ウルヲ恰モ人
民公役ヲ以テ其義務ト為スノ理ニ同シ此法ハ速ニ其用
ヲ辨シ且其價ヲ定ムルニ絶テ其高卑ヲ争フナシ大ニ
政府ノ費用ヲ省クヲ以テ戦争ノ時ハ最モ此法ヲ便利ト
為ス此法ハ佳良ノ細馬ヲ得難シ然レ挽馬ハ良好ナル者
ヲ得ヘシ且皆己ニ挽牽ノ事ニ熟スルヲ以テ永ク調習ス
ルヲ要セス

凡ソ徵馬ニ関スル事ハ騎馬兵種ノ士官ニ任スルヲ善シ
シス騎馬兵種ノ士官ハ其兵種ニ適スル馬ヲ擇フニ長
ス故ニ此士官ハ此事ニ於テ軍ノ利益ヲ計ルヲ以テ其任
ト為シ徵馬管事ト為リ政府ノ費用ヲ督察スル有司ノ監

督ヲ受ケテ事ヲ執ル

三 軍用諸器ノ製造

諸器具製造ニ関スル給養ノ制ハ軍用諸器ノ製造貯藏保
存改修ノ為メニ要スル事務并建築ノ諸事ニ関涉ス

此法歐羅巴諸國各同シカラス某ノ國ニ於テハ其製造甚
ク自由ニシテ皆私有ノ製造局ニ於テ之ヲ造リ唯有司ノ
監督ヲ受クルトス某ノ國ニ於テハ政府製造局ヲ設ケ
自由ニ其製造ヲ為ス然レ若シ私有ノ製造局ヲ用ウルヲ
利トスルハ其局ヲ監督シテ之ヲ造ラシム又某ノ國ニ
於テハ此二法ヲ雜用ス
凡テ其採ル所ノ法如何ヲ論セス治乱共ニ其法ヲ廢弛セ

サラシムルヲ肝要ト為ス其故ハ器具ノ中ニハ白兵小銃
火藥彈丸大砲ノ如キ兵隊戰闘ノ要具アレハナリ而シテ
其製造ハ工場武庫兵廠鑄造局製作場火藥製造局煉鐵
場ト稱スル屋宇内ニ於テス可シ

夫レ此諸工作ヲ督理センニハ製造術ニ精熟ヒシ者ヲ要
スルヲ以テ工作ノ事ハ砲工兵ノ士官ヲ擇テ任ス可キ
瞭然タリ諸國ノ軍砲兵特別參謀及ヒ工兵特別參謀ヲ置
クハ則之カ為ノナリ而シテ砲兵特別參謀ハ戰闘ニ用ウ
ル諸品ノ製造ヲ管理シ工兵特別參謀ハ國ノ防禦ノ為
ニ設クル要塞ノ築造ヲ管理ス
此士官ハ皆各其本課中ノ工作ニ屬スレ諸般ノ管掌ナリ

而シテ經費ノ檢證ヲ為ス有司ノ給養監督ニ從テ事ヲ執
ル

四 購買ノ法

歐羅巴洲中何レノ國ニ於テモ政府軍ニ必要ノ諸物ヲ製
造スルコトナシ或ハ時宜ニ因テ之ヲ製造スルコト亦無キニ
非スト雖モ大概ニ之ヲ以テ普通ノ定法ト為ス
凡テ軍ノ要須スル諸物ハ直ニ製造人ニ就テ之ヲ買ヒ或
ハ牙保ニ就テ之ヲ辨ス
購買ニ二法有リ直購ハ其軍ニ屬スル士官軍屬兵隊自ラ
之ヲ購求ス間購ハ商人牙保ノ管家或ハ店家ヲシテ之ヲ
給輸セシム

給養諸務ノ中最重スル者ニシテ故ヤラニ検査ヲ要シ及
ヒ直ニ陣中ノ保育ニ用ケル者ハ宜シク直購ヲ以テスヘ
シ而シテ其斯ノ如ク為スヘキ者ハ糧食病院、徵馬及ヒ軍
用諸器具製造ノ勤務ナリ

第三篇 引用書目

兵學教程ノ初二教中ニ説ク所ヲ以テ見レハ此二教ハ兵
學中諸大家ノ稱シテ兵理學ト名ツケル高遠ノ域ナルヲ
知ルヘシ

然レ此二教ニ於テハ其説細目ニ及ハス又之カ論考ヲ為
サス唯其事理ト事態トヲ説キ而シテ其事ノ由テ来ル所
ノ起因ヲ論セス故ニ軍ノ編成及ヒ兵制ノ如キモ唯其主

旨ト其趣ヲ見ハシ且古来ノ事跡ヲ緊論シテ其次弟ニ進
歩セシ状ヲ示セシノミ抑少壯ノ士此書ヲ熟讀シテ其學
識上達ニ數万ノ同寮中ニ於テ獨リ名譽ヲ施スモ敢テ難
シトスル所ニ非ナルヲ知ラシムレハ誠ニ記者ノ大幸ト
謂フ可キナリ

本篇ハ古来名将大家ノ名説ニ據テ編輯セリ今學者ニ示
スニ其根據スル源ヲ以テシ後來此書ノ由テ出ル所ヲ採
リ以テ益其知識ヲ堅確ナラシメント欲ス則其參考ニ用
サシ書目左ノ如シ

大将撒古ノ夢幻談 一千七百三十一年著
拿破侖第一ノ原則論 一千八百二十四年著

摩蘭得著查得 / 建軍說

一千八百二十九年著

大將馬爾門 / 兵制論

一千八百四十六年著

陸軍會計監督武伯 / 國軍勤務說

一千八百十年 著

陸軍會計監督比五臣 / 給養說

一千八百六十九年著

償伯拉 / 兵理說

一千八百二十八年著

兵學教程讀本卷之一 終

終

